

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2000年度

榛原町文化財調査概要 25

2002

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2000年度

榛原町文化財調査概要 25

2002

榛原町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成12年度（2000年度）に榛原町教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要 25）である。
- 2 発掘調査は、平成12年（2000年）4月17日に着手し、平成13年（2001年）3月30日に終了した。なお、本書の刊行は、平成13年度（2001年度）事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、榛原町教育委員会生涯学習課技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 5 座標系は第VI系を用いており、測量図及び遺構図の方位は、座標北となっているが、一部には磁北（M. N）も使用している。
- 6 土層の色調は、『新版標準土色帖』1987年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、榛原町教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆は柳澤と横澤慈（縄文土器、弥生土器）が行い、編集は柳澤が行った。

目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要 ······	1
1 埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2 調査組織等	
II 位置と環境 ······	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 下城・馬場遺跡第7次発掘調査概要 ······	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 ま と め	
5 抄 錄	
IV 額井南遺跡第3次発掘調査概要 ······	42
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 ま と め	
5 抄 錄	
V 丹切遺跡第10次発掘調査概要 ······	45
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 ま と め	
5 抄 錄	

報 告 書 抄 錄

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査の概要

棟原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も町内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、棟原町教育委員会では、1986年に町内遺跡の遺跡詳細分布調査を実施し、いわゆる「遺跡地図」の整備をはかり、「棟原町遺跡分布調査概報」を刊行した。その後、新たな調査成果等をもとに、1993年には「棟原町遺跡分布地図」を刊行し、「遺跡地図」の改訂を行い、埋蔵文化財の保存・活用をはかっていく基礎資料としている。

毎年、町内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、「棟原町遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところはあるが、「遺跡地図」の改訂が必要な時期ともなってきている。

2000年度（平成12年度）に棟原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等は表1のとおりである。また、2000年度（平成12年度）に実施した発掘調査等は表2・図1のとおりである。なお、本書には、国庫補助事業・県費補助事業として実施した事業のうち、下城・馬場遺跡（7次調査）、額井南遺跡（3次調査）、丹切遺跡（10次調査）の調査概要を収録している。

表1 2000年度（平成12年度）発掘届・発掘調査件数等一覧表

遺跡有無確認 踏査願	埋蔵文化財 発掘届 (民間)	埋蔵文化財 発掘通知 (公共)	埋蔵文化財 発掘届・通知 合計	発掘調査 (町担当)	工事立会 (町担当)	測量調査 (町担当)	調査件数 合計
0	3	7	10	4	4	1	9

摘要 種別	遺跡名	所在地	調査原因	原団者	工事面積(㎡)	措置等
埋蔵文化財発掘届 (民間)	山辺三中村遺跡	棟原町山辺三1728	個人住宅建設工事	筒井茂司	350	事業未着手
	丹切遺跡	棟原町萩原元萩原533~544	個人住宅建設工事	松本重宣	160	2000年度 町 発掘調査
	丹切遺跡	棟原町萩原元萩原411-1	個人農業用倉庫建設工事	西田辰三郎	90	2000年度 町 工事立会
埋蔵文化財発掘届 (公共)	丹切遺跡	棟原町下井足17-3	序舎建設工事	棟原町	10,991	2000年度 町 発掘調査
	萩原前川遺跡	棟原町萩原	道路拡幅工事	棟原町	2,200	2000年度 町 工事立会
	丹切遺跡	棟原町萩原元萩原164	防災行政無線設置工事	奈良県	1.7	2000年度 町 工事立会
	丹切遺跡	棟原町萩原棟原町下井足	歩道整備工事	奈良県	880	2000年度 町 工事立会

表2 2000(平成12)年度発掘調査等一覧表

番号	調査種別	調査地番号	遺跡名	調査地	調査期間	調査原因	調査面積 (㎡)	調査概要		備考
								遺構	遺物	
1	発掘調査	奈良県御所市下坂馬場遺跡 (7次調査)	下坂馬場遺跡 (7次調査)	橿原町下坂 1309-1 1493地	2000・4・26~ 2000・8・24 (橿原町)	施設確認調査 (築居者)	79	石垣、サヌカ小片、磨石、鐵文土器、 弦生土器、須恵器、土師器、瓦器、 瓦質土器、陶器、磁器、铁钉、石臼	縄文時代~古墳時代・ 中世の遺物散布地、 本管所収	
2	発掘調査	1-5 1-2-D-52	橿原南遺跡 (3次調査)	橿原町御井 519	2000・5・11~ 2000・5・19 (大手次穴)	個人墓地造営工事	6	なし(自然谷地形)	瓦器、土師器	縄文時代~古墳時代・ 中世の遺物散布地
3	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (9次調査)	橿原町下井 17-3	2000・9・1~ 2000・9・30 (橿原町)	後行合造垂木工事	140	素掘跡(近世)	サヌカ介片、須恵器、土師器、瓦器、 陶器、磁器、铁钉	縄文時代~中世の遺 物散布地、集落跡
4	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (10次調査)	橿原町御井 533~535	2001・2・16~ 2001・3・26 (佐本真喜也)	個人住宅建設工事	9	なし(自然谷地形)	須恵器、土師器	縄文時代~中世の遺 物散布地、集落跡
5	測量調査	1-56-57 12-D-31	愛宕山古墳群 相地所在未詳 (遺跡名未定)	橿原町上井 774	2000・10・25 (橿原町)	施設確認調査 (三浦正人)		前方後円墳1基、竪穴 系構造式石室? 円墳4基、方墳1基、古 墳状隆起1箇所	平成10年度 からの施設	古墳時代後期の古墳群
6	立会調査	1-31 12-D-33	相地所在未詳 (遺跡名未定)	橿原町御井 774	2000・4・3	個人住宅建設工事			土師器(採集)	弥生時代~中世の遺 物散布地
7	立会調査	1-24 12-D-11	萩原家川遺跡	橿原町萩原 2000・9・20	道路改修工事 (橿原町)			なし(遺物包含層)	土師器	弥生時代~古墳時代・ 中世の遺物散布地
8	立会調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡	橿原町御井 164	2000・11・6~ 2000・11・14 (奈良県)	防災行政無線 設置工事		なし		縄文時代~古墳時代・ 中世の城郭跡
9	立会調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡	橿原町御井 411-1	2001・1・15 (西田辰三郎)	個人農業用倉 庫建設工事		なし		縄文時代~古墳時代・ 中世の遺物散布地、 中世の城郭跡



図1 2000(平成12)年度 調査遺跡位置図

2 調査組織等

2000年度の現地調査（下城・馬場遺跡、額井南遺跡、丹切遺跡）及び2001年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

2000年度（平成12年度）

総括 教育長	田村義治
庶務 事務局長	池野 隆
教育 次長	山本米三
生涯学習課	
課 長	中村好三
課長補佐	安達宗弘
	打越明美
調査 技 師	柳澤一宏
補 助 員	井上好美、永野仁、横澤慈、上西高登、岡田諭、坂佳彦、井上雅善、楠田佳代
作 業 員	池田生子、粉川君江、中谷喜代子、古川マサエ、古城シズ子、蔽内秀子、太田政信、中尾一三、樺原栄子
測量業務委託	㈱ワールド
指導・助言	奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、泉 拓良、辻本宗久
協力	太田貴之、大手次夫、松本重寛

2001年度（平成13年度）

総括 教育長	田村義治
庶務 事務局長	池野 隆
教育 次長	山本米三
生涯学習課	
課 長	中村好三
課長補佐	安達宗弘
	打越明美
調査 技 師	柳澤一宏
補 助 員	井上好美、永野仁、横澤慈、上西高登、岡田諭、坂佳彦、井上雅善、山岡政郁、谷村美樹子
遺物写真撮影	佐藤右文

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間に縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも呼ばれ、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの険しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の周囲は概ね標高約400～800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵後線をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図2 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献に度々登場し、これらの内容等からこの地は軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では4点の有舌尖頭器が出土しており、うち、3点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘

調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峰遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峰中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には數基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峰古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまっているところでは、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

紙幅の都合上、多くを述べることができないが、「位置と環境」は、以前から他の報告書等に記載されており、次の文献が詳しい。

- 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』 榛原町教育委員会 1977
- 『能峰遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1986
- 『下井足遺跡群』 奈良県教育委員会 1987
- 『野山遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1988
- 『高田垣内古墳群』 奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会 1993
- 『石榴垣内遺跡』 奈良県教育委員会 1997

III 下城・馬場遺跡第7次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は奈良県宇陀郡株原町大字沢に位置し、沢城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。遺跡は尾根の西斜面に広がり、3段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畠地や水田となっており、以前から縄文時代から中世にいたる遺物が散布しているところである。

1984年度には「沢集落センター」建設に伴う発掘調査（第1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、中世（12世紀～13世紀）の遺構・遺物を検出している。その後、遺跡高所の平坦面において個人による土地改良工事が計画されたため、1993年度に第2次調査、1994年度に第3次調査、1997年度に第4次調査を断続的に実施し、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構をはじめ、多くの遺物を検出し、中世の城館跡の一端を検出している。

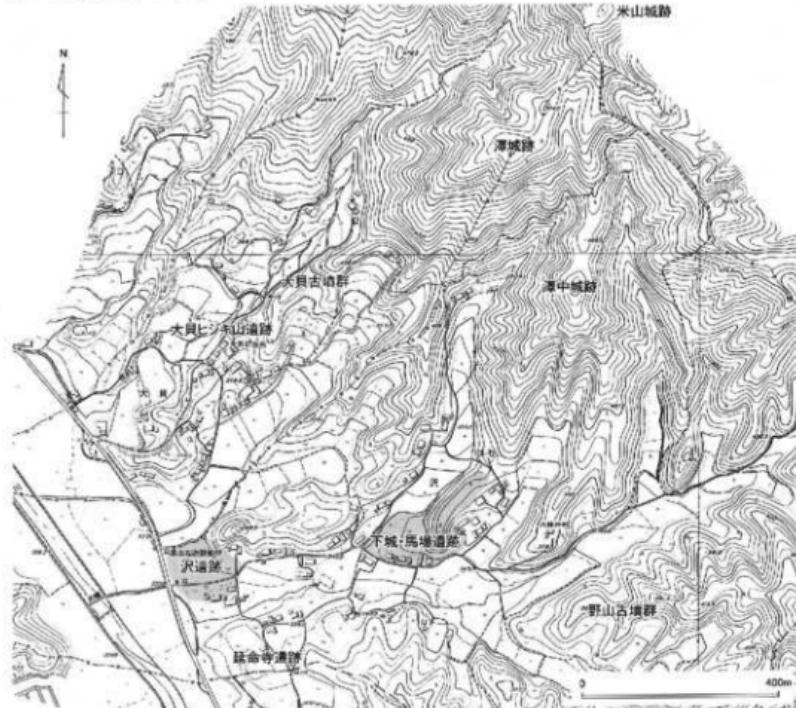


図3 下城・馬場遺跡位置図

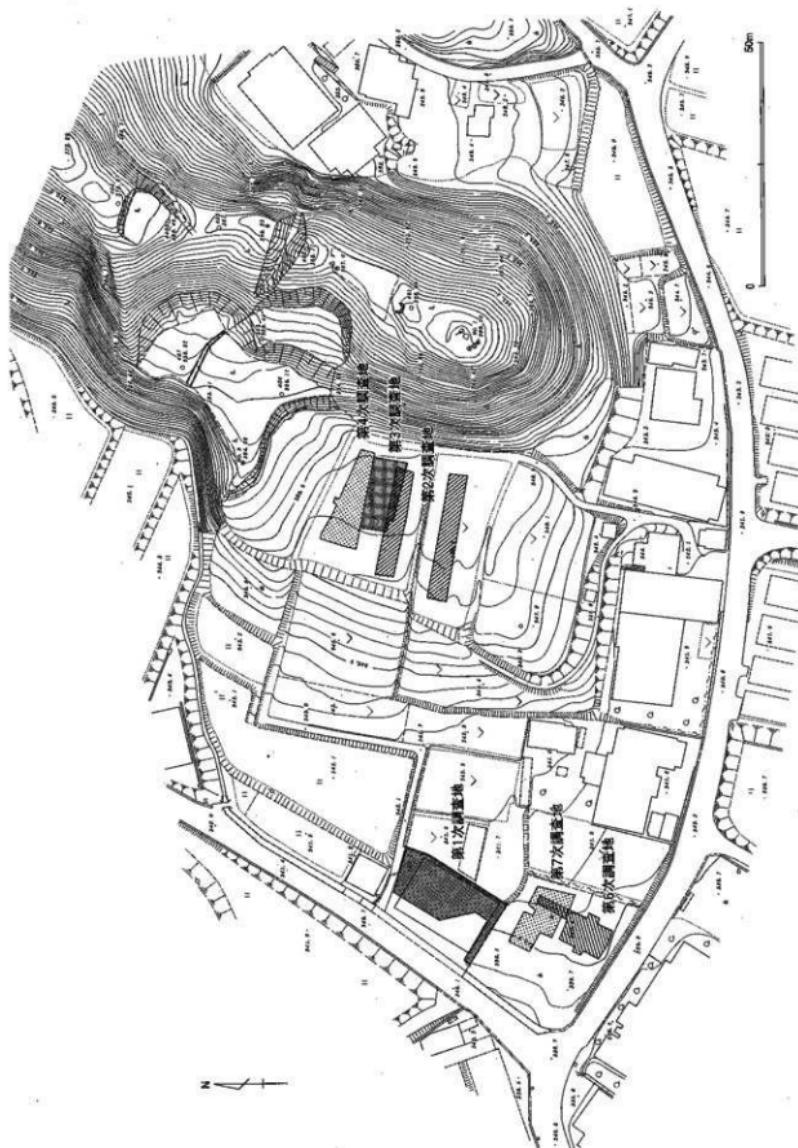


図4 下城・馬場遺跡調査位置図

これらの発掘調査によって、下城・馬場遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の城館跡（居館跡）と推定されることから、さらにその状況等を明らかにする範囲確認調査を計画し、1998年度に地形測量等（第5次調査⁽¹⁾）、1999年度には、遺跡南西隅部分の遺構・遺物の状況を明らかにする第6次調査⁽²⁾を実施した。今年度（第7次調査）は、6次調査地の北側において発掘調査を継続し、併せて東尾根の地形測量も行った。発掘調査（現地調査）は2000年4月26日～8月10日にかけて断続的に行い、地形測量は、8月11日～8月24日にかけて行った。

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、先述のとおり、尾根の西斜面、標高約339m～351mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡を望むことができる。また、北方には沢城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。この遺跡の周辺は縄文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域もある（図3）。

3 遺跡の調査

（1）調査区と基本土層

第6次調査の際、トレンチを北側へ拡張したところ、多くのビット等の遺構を検出したので、これらの状況を確認するため、第6次調査地北側の継続調査を行うこととし、今年度の調査を第7次調査とした。第1次調査地と第6次調査地との間に南北8m×東西14mの範囲において調査区を設定したが、果樹等の樹木の都合で不整形なものとなっている（図4、図版1）。

基本層序は、第6次調査時と同様、1層が耕作土、2層が灰黄褐色砂質土、3層が暗灰黄色砂質土、第3層下は、にぶい黄褐色砂等の地山面となる。一方、一部に黒色土の広がりが確認でき、第4層としている。西端では地形が西傾し、谷状を呈すると考えられる（図6、図版1）。

（2）検出遺構

土層及び遺構の前後関係から3時期の遺構を確認している。今次の調査地は、6次調査地と重複しているので、6次調査の遺構についてもあわせて触れておく。

A 上層遺構（図5、図版1・2）

6次調査時、その一部を確認しており、本調査により改めて、土坑、溝を検出することができた。土坑からは、土師器、瓦器、瓦質土器の細片のほか、壁土片も出土している。

B 中層遺構（図7・8、図版1・2）

調査地の各所において、土坑、溝、ビットを検出している。これらからは、縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器等の細片が出土している。SK-01からは、二次焼成の壁土塊及び石材、土師器片が出土している。焼失建物の片付けに伴うものであろうか。

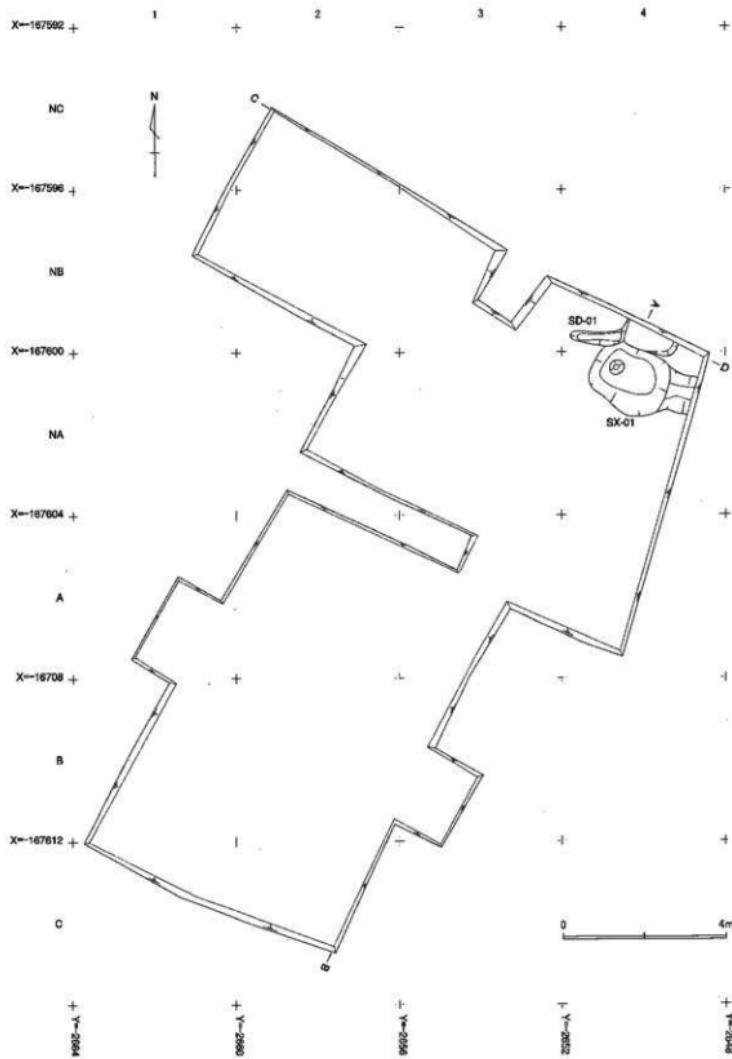


図5 下城・馬場遺跡（第6・7次）遺構平面図（1）

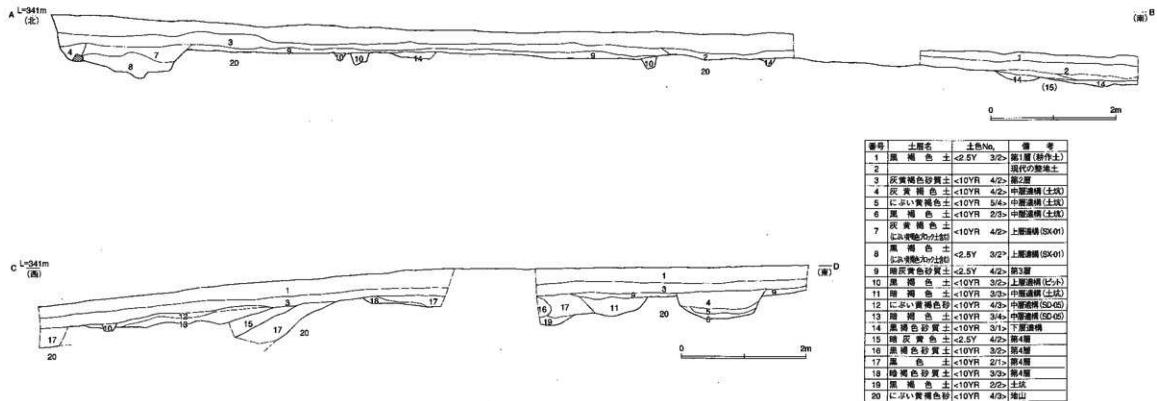


図6 下城・馬場遺跡(第6・7次) 土層断面図

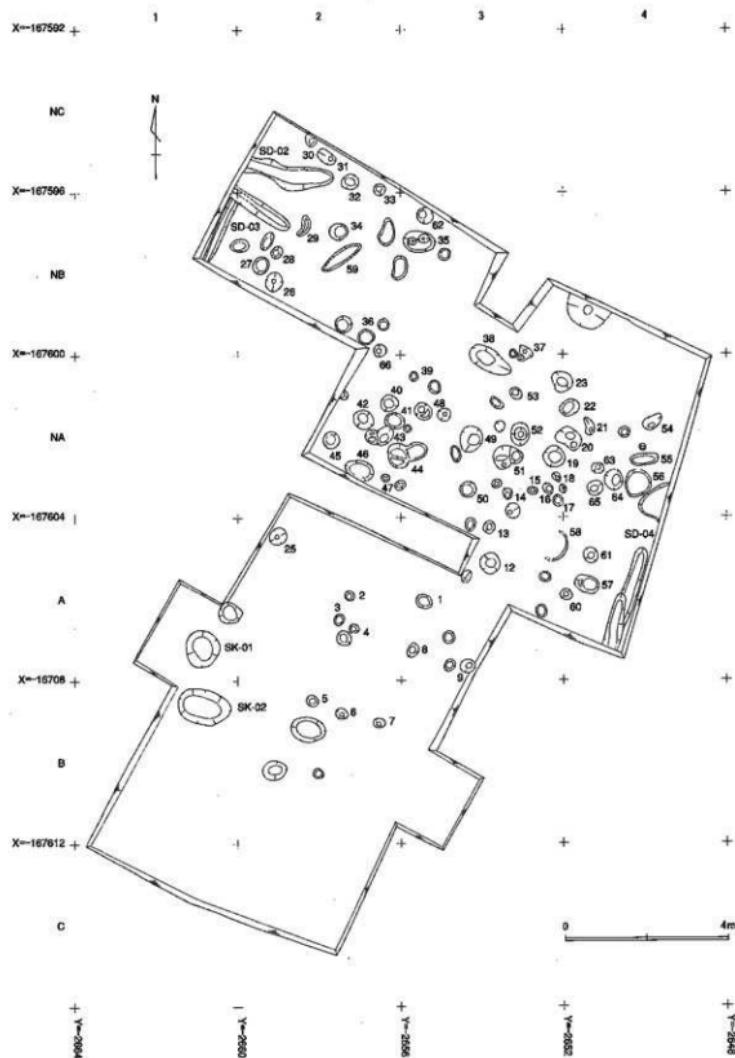


図7 下城・馬場遺跡（第6・7次）造構平面図（2）（数字はPit番号）

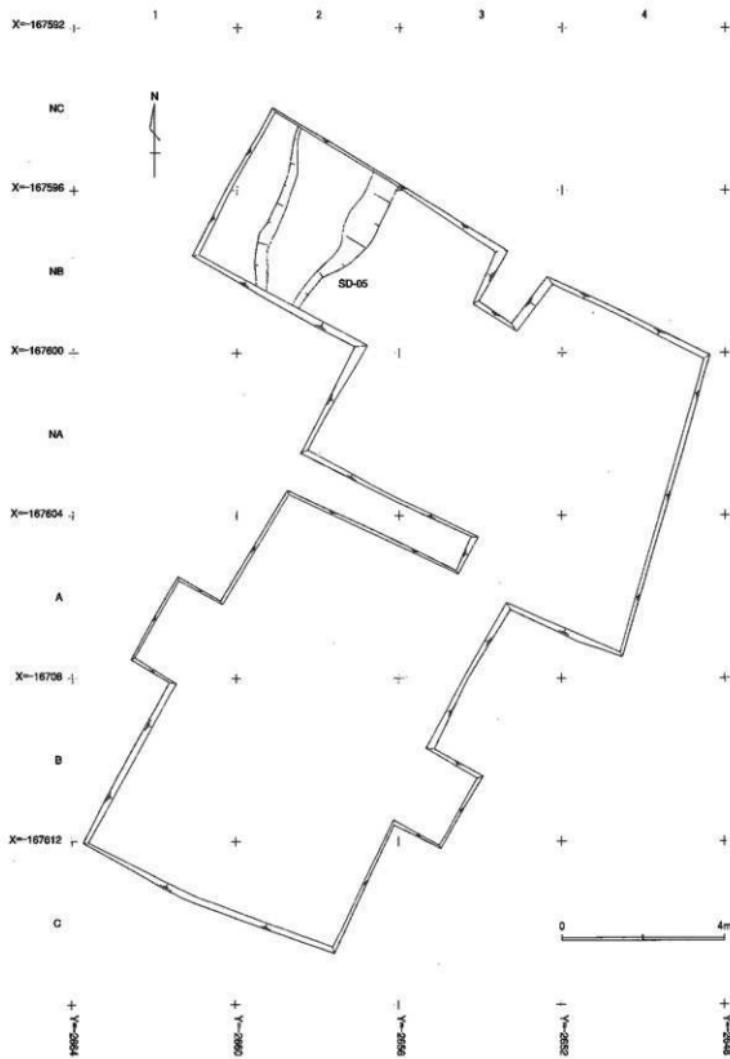


図8 下城・馬場遺跡（第6・7次）遺構平面図（3）

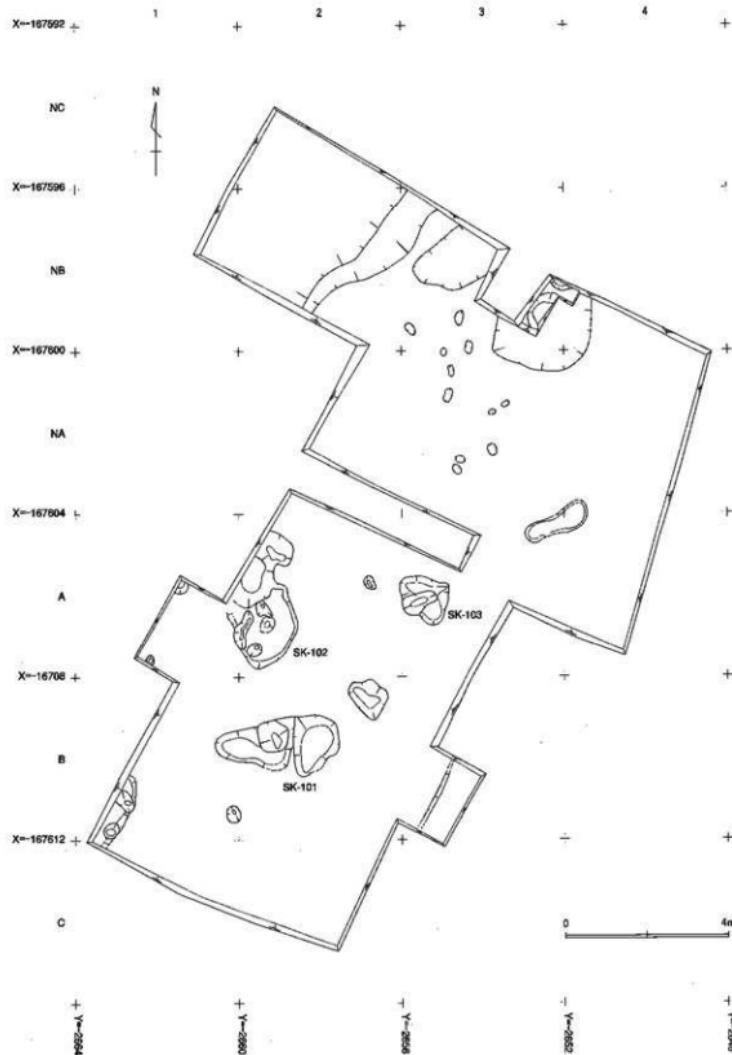


図9 下城・馬場遺跡（第6・7次）遺構平面図（4）

6・7次調査地に広がるピットの一部は、掘立柱建物を構成するものと考えられるが、これを復元するまでは至っていない。なお、Pit19からは2点の土師皿、Pit 38（土坑）からは石臼片が出土している。また、西側ピット群形成前には、幅約 1.3m～2.7m、深さ約 0.3m の南北溝（SD-05）が穿たれており、弥生土器、土師器、瓦器、磁器の網片、鉄釘などが出土している。

C 下層遺構（図9、図版1・2）

中層遺構保護のため、一部を確認したにすぎないが、調査区北辺において、土坑を確認している。遺物の出土は認められないが、縄文時代のものと推定される。また、黒色土を埋土とするピットも認められる。

（3）出土遺物

遺物は、各層及び一部の遺構から出土しており、縄文土器、弥生土器、石器、サヌカイト2次加工剥片・剥片、磨石、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、円形土製品、鉄釘、鉄刀子、火打金、瓦、茶臼、砥石、壁土等が認められる。これらの出土遺物のうち、6次調査出土遺物の一部を既に報告しているが、調査地が隣接・重複していることから、6・7次調査で出土した遺物をあわせて報告する。

A 土器

縄文土器（図10～11、表3・4、図版3）

6次調査では22点が出土し、うち13点を図示した（図10、図版3）。このうち時期を明らかにできるものはわずかに4点であり、早期、前期、後期のものが含まれる。詳細は観察表として表3にまとめている。

1は早期前半の押型文土器であり、縦位の山形文を施す。2は内外面ともに条痕を施す、薄手の無文土器である。器厚は約2.0mm～3.5mmを測り、器壁の薄さから判断すると、前期初頭から前葉に属するものであろう。3・4は後期の有文土器である。3は口縁部破片で、口縁端部に刻みを施し、外面には縦位の沈線を飾る。4は櫛状工具で施す、いわゆる条線文土器である。条線の単位は5条を数える。5～13は無文土器である。無文土器にも3通りあり、内外面ともナデのもの（5）と、条痕を施すもの（6～10）、外面にケズリを加えるもの（11～13）とに分けられる。条痕を施すものには、内外面ともに条痕を施すもの（6・7）と、外面のみに条痕を施すもの（8～10）とに分けられる。ケズリを加えるものは概ね晩期に位置付けられ、その他も概ね後期～晩期の範疇で捉えられるものである。

7次調査では14点出土し、うち10点を図化した（図11、図版3）。時期を判別できるのは3点で、それぞれ早期、晩期である。これらの詳細は観察表として表4にまとめている。

1は波状を呈する口縁部破片で、胎土には多量の纖維を含む。口縁端部を面取りし、そこに刻みをもつ。外面には2列の爪形文を施す。内面は植物茎状原体による擦痕状の条痕である。早期後葉の柏畠式に該当する。2・3は晩期の凸帯文土器である。2は黒色磨研土器で、浅鉢と考えられる。口縁部に1条の凸帯を巡らし、頸部で屈曲する、いわゆる逆「く」字状を呈する器形である。泉拓良氏の編著による凸帯文前半2期にあたり、口酒井式期に位置付けられる。3は深鉢である。4～10は無文土器で、4は口縁部片。口縁は平らに面取りを施す。調整はナデである。5～10は胴部破片。5は条痕調整の深鉢である。斜位に巻貝による条痕を施すもので、体部下半であろう。外面の2箇所に粘土紐の接合痕が観察できる。6～10は外面に下から上方向へのケズリを施す体部片である。

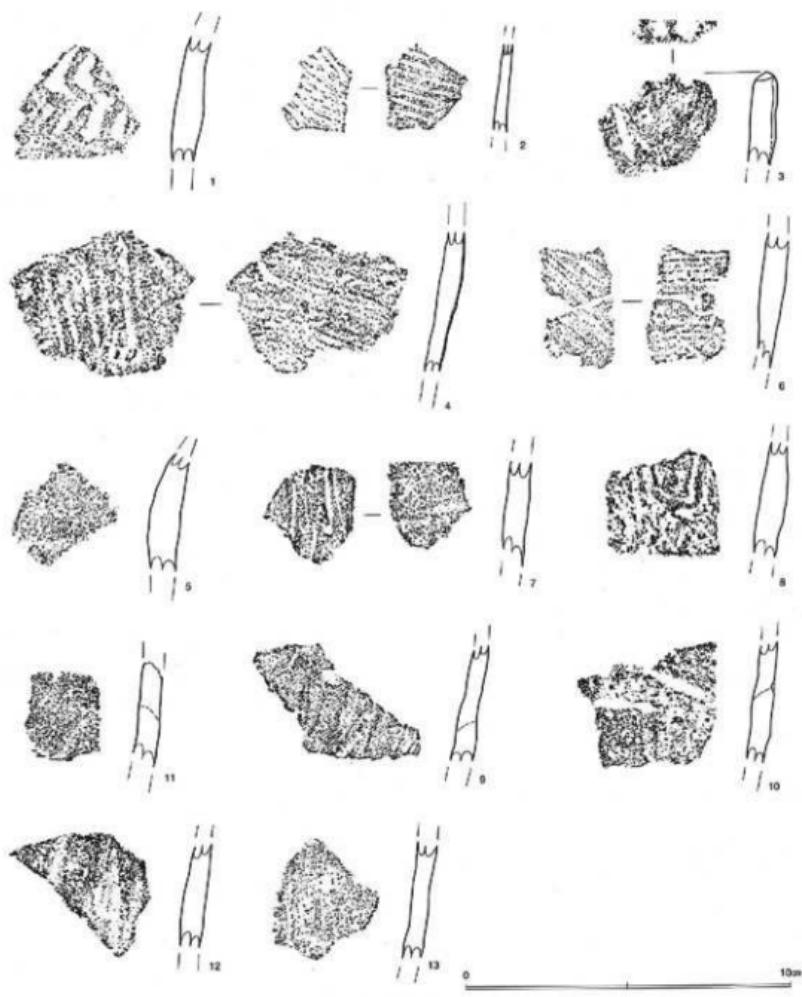


図10 下城・馬場遺跡（第6次）出土繩文土器実測図

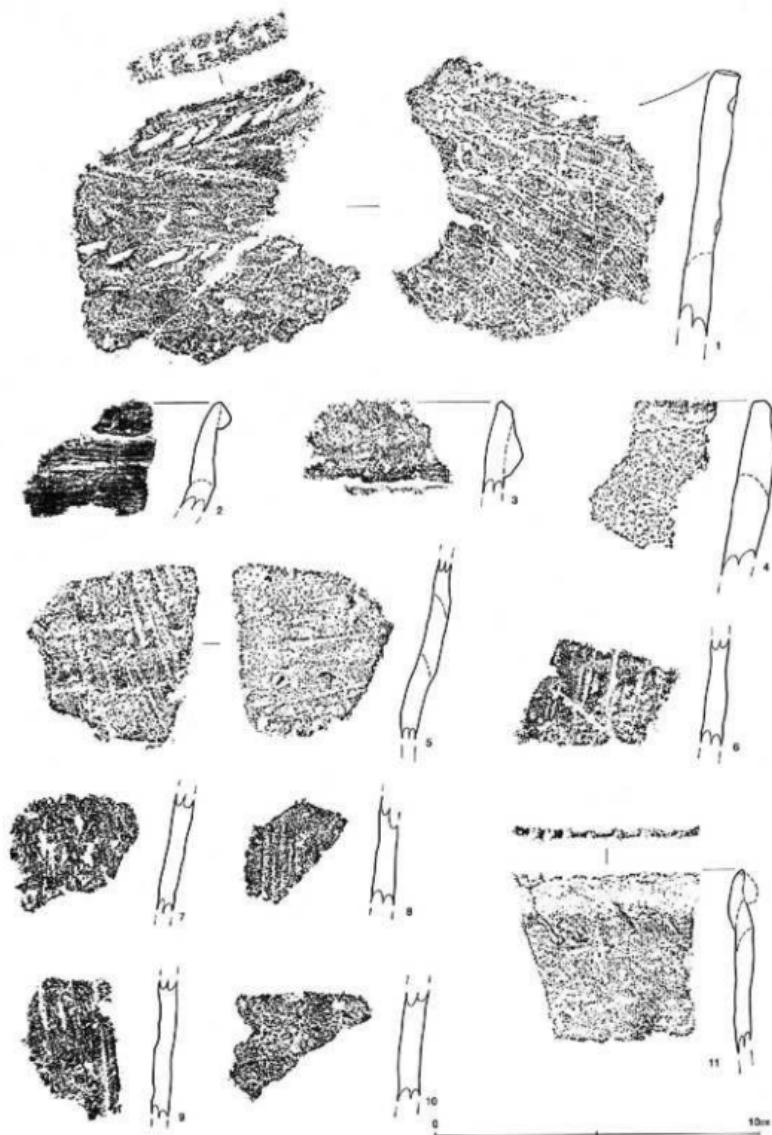


図11 下城・馬場遺跡（第7次）出土繩文土器実測図

また、調査地に隣接する地点において、1点の縄文土器が採集されているので、ここであわせて紹介しておく。11は凸帯文土器の口縁部片である。凸帯は剥離しており、その形状は明らかではない。ほぼ垂直に立ち上がり、口縁下で一度内屈した後に若干外へ開く器形である。口縁には刻みをもつ。内面には粘土縫の接合痕が観察できる。詳細は定かではないが、滋賀里IV式にまでさかのほる可能性がある。

弥生土器（図12、表5、図版3）

出土した5点を図化した。これらの詳細は観察表として表5にまとめている。1・2は壺の小片である。体部はやや内傾しながら立ち上がる。1の口縁は外反し、口縁端部を丸くおさめる。体部外面に3条の鉛沈線文、口縁端部に刻みを施す。5は壺底部である。平底の底部から体部は外上方へ開きながらのびる。

瓦器

楕（図14・15、表6・7）

14-1の体部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部内側には沈線がめぐる。内外面には横方向の暗文を施す。14-2の底部には逆台形状の低い高台を貼り付ける。底部内面には、同心円暗文を施す。14-3の体部はやや内彎気味に外上方へのびる。口縁端部は尖り気味に仕上げ、内側には沈線をめぐる。内面には粗い横方向の暗文を施す。これらはSD-05出土。

15-15の体部はやや内彎気味に外上方へのびる。口縁端部はやや外反し、内側には沈線がめぐる。内外面ともやや粗い横方向の暗文を施す。A-3区第2層出土。

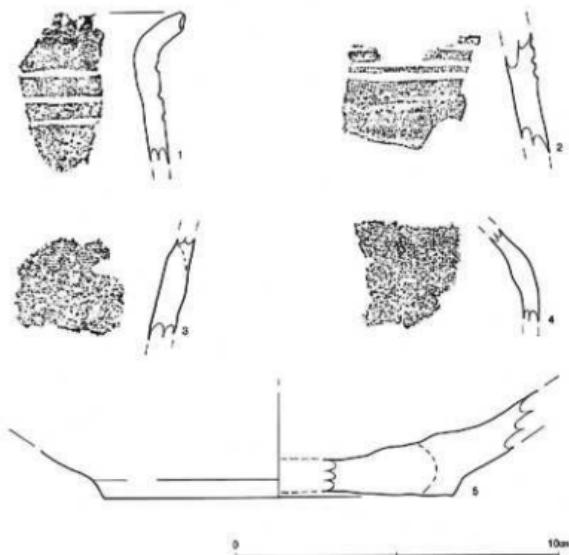


図12 下城・馬場遺跡（第6次）出土弥生土器実測図

土師器

皿(図13~15、表6・7)

13-1・2の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部をやや尖り気味にする。底部は平底である。

13-2の器壁は0.1mmと薄い。いずれもSK-01出土。

13-6は灯明皿である。口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部は尖り気味におさめる。底部中央はやや上底である。器形はやや歪む。Pit10出土。

13-7の口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部は尖り気味におさめる。13-8の口縁部下半は直線的に外上方へのび、上半は内彎して上方にのびる。口縁端部は尖り気味にする。器壁は0.1mm~0.2mmと薄い。2次焼成が認められる。いずれもPit11出土。

13-9の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部をやや尖り気味にする。底部は上げ底である。

13-10の口縁部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部をやや尖り気味にする。底部は上げ底である。

13-11の口縁部はやや肥厚し、外上方にのびる。口縁端部は丸く仕上げる。いずれもPit19出土。

13-12の口縁部はやや内彎気味に外上方へ短くのび、口縁端部は尖り気味にする。底部はやや上げ底につくる。内面には全面に不定方向のハケ目が認められる。Pit22出土。

13-13の口縁部はやや内彎気味に外上方へ短くのび、口縁端部は尖り気味にする。底部は平らにつくる。6次調査第1層出土。

14-4の口縁部はやや内彎して外上方へのびる。口縁端部はやや肥厚し、丸い。SX-01出土。

14-6の口縁部は外反気味に外上方へのびる。口縁端部は尖り気味におさめる。Pit26出土。

14-8は灯明皿で、口縁部はやや内彎気味に上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。Pit32出土。

14-10は歪みが大きいが、口縁部は内彎して上方へのび、口縁端部は尖り気味に仕上げる。Pit43出土。

14-12の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。Pit51出土。

14-13の口縁部は外反気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。Pit66出土。

14-14の口縁部はやや内彎気味に上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。第2層出土。

15-17の口縁部は直線的に外方へのび、器高が低い。口縁端部は丸くおさめる。15-18の口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。15-19の口縁部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。15-20・21は灯明皿で、口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。15-21の底部はやや丸味がある平底につくる。これらは第3層出土。

15-24の口縁部は外反気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。15-25の口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部中央は、やや上げ底気味につくる。15-26の口縁部は短く上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。15-27の口縁部はやや外反気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部はやや歪みがある上げ底につくる。15-28の口縁部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部を尖り気味におさめる。第4層出土。15-29の口縁部はやや内彎気味に外上方へのびる。口縁端部はやや外反し、尖り気味におさめる。15-30・31は灯明皿で、口縁部は内彎気味に外上方へのび、口縁端部を尖り気味におさめる。15-30の底部はやや上げ底につくる。これらは第4層出土。

15-34の口縁部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部は平底につくる。

15-35・36の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部を尖り気味におさめる。15-37の口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。これらは遺構面出土。

土師器

土釜（図13・15、表6・7）

- 13-4の口縁端部は上方へのび、その断面形態は三角形を呈する。SK-02出土。
13-5の体部は内彎し、体部最大径のところに、幅の短い鶴を貼り付ける。SK-01出土。
15-32の口縁部は外上方へのびる。口縁端部上端は上方へつまみ上げる。第4層出土。
15-33の口縁部は外方へのびる。口縁端部はやや肥厚し、断面形態は方形を呈する。第4層出土。

瓦質土器

擂鉢（図13～15、表6・7）

- 13-3は内面に9条以上を1単位とする擂目を下から上へ施す。SK-01出土。
13-15の体部は、やや内彎気味に外上方へのびる。底部は平底につくる。6次調査第1層出土。
14-5の体部は内彎気味に外上方にのびる。口縁端部は外反し、丸い。SX-01出土。
14-9の体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部は外反する。口縁端部は先細りするが丸くおさめる。Pit35出土。
15-16の体部内面には8条以上を1単位とする擂目を下から上へ施す。第2層出土。

火鉢（図13・15、表6・7）

- 13-11の体部は直線的に外上方へのび、底部は平底である。体部下方の外面には突帯を貼り付ける。Pit49出土。

15-22の全容は明らかでないが、外面に四角形のスタンプ文を施す。第3層出土。

鉢（図14、表7）

- 14-7の体部は内彎気味に上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。外面はタテ方向のミガキを施し、四角形のスタンプ文を施し、その上下にそれぞれ1条の線刻をめぐらせる。Pit26出土。

陶器

擂鉢（図13、表6）

- 13-16は口縁端部を丸く仕上げ、内面に1条の沈線、外面には2条の沈線をめぐらせる。口縁端部外面の下端は突出し、断面形態は三角形を呈する。6次調査北拡張1・2層、3層出土。

壺（図15、表7）

- 15-23の体部は内彎し上方へのび、樽形を呈する。底部は平底である。体部外面は暗赤褐色を呈し、その大半には、灰オリーブ色またはオリーブ黒色の施釉が認められる。体部外面下半は搔き落しと思われる。体部内面には同心円文が認められる。第2・3層出土。

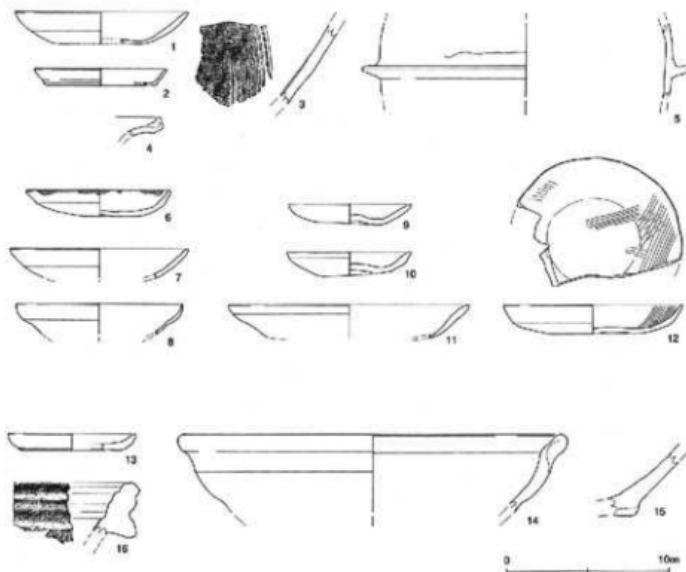


図13 下城・馬場遺跡（第6次）出土中世土器実測図

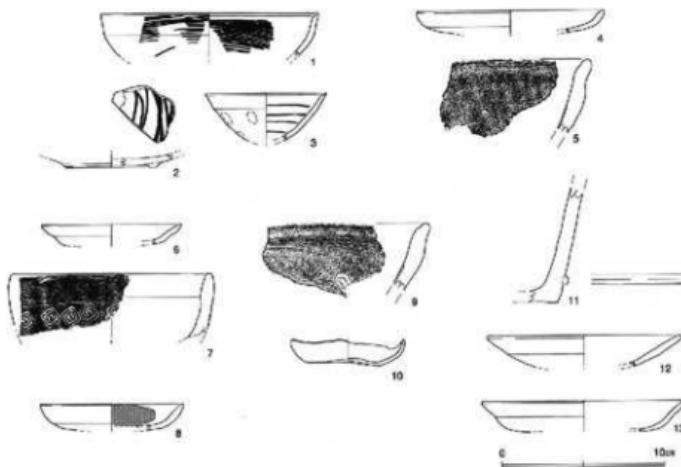


図14 下城・馬場遺跡（第7次）出土中世土器実測図（1）

B 土製品

円形土製品（図16）

瓦質土器を転用し、円形に加工した土製品である。瓦質土器を打ち欠き後、剖面を研磨し、円形に整える。瓦質土器本来の外面は灰色、内面は浅黄色を呈し、焼成は良好である。長径2.9cm、短径2.7cm、厚さ0.6cm～0.7cmである。6次調査第3層出土。

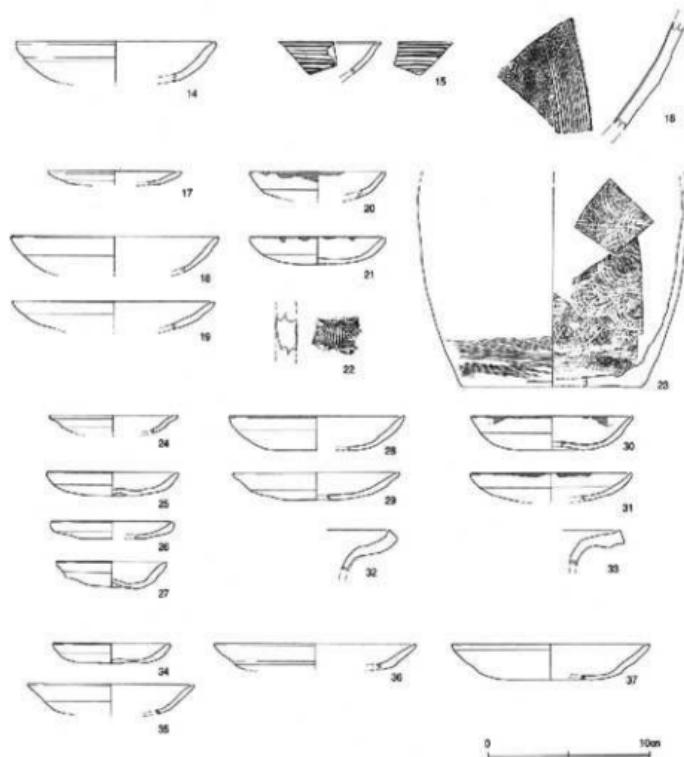


図15 下城・馬場遺跡（第7次）出土中世土器実測図（2）



図16 下城・馬場遺跡（第6次）出土土製品実測図

C 金属製品

鉄釘 (図17・18、表8)

17-1の頭部はL字状に折り曲げ、現存長7.8cmを測る。2は現存長5.2cm、3は現存長3.3cmである。これら3点は、いずれも6次調査第1層（耕作土）出土。

18-1も頭部をL字状に折り曲げ、現存長7.3cmを測る。SD-05上層出土。2の頭部は折り返し、身部をL字状に折り曲げ、現存長6.0cmである。第2層出土。

法量等は表8にまとめている。

火打金 (図17-4)

山形火打金と思われる。現存長10.5cm、最大幅3.5cm、厚さ0.1cm～0.2cmを測る。左先端部分は欠損、右先端部分は細長く、先細りしている。SX-01出土。

小柄 (図17-5)

現存長11.3cm、刀身幅1.4cm、銅製柄は全長9.6cm、幅1.3cmを測る。柄には装飾は認められない。Pit25出土。

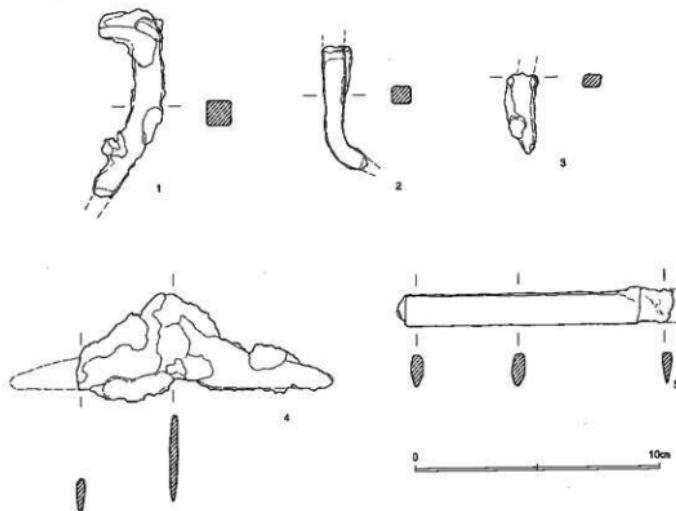


図17 下城・馬場遺跡（第6次）出土金属製品実測図

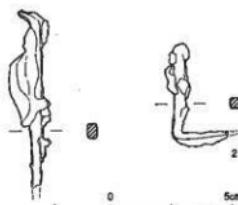


図18 下城・馬場遺跡（第7次）出土金属製品実測図

表8 下城・馬場遺跡（第6・7次）出土鉄釘計測表

(単位=cm)

挿画番号	全長(現存長)	身部断面(数値は断面図位置)	頭部の形態	備考
17-1	7.8	角 1.0×1.0	折り曲げ(L字状)	6次調査 第1層出土
17-2	5.2	角 0.7×0.8	-	6次調査 第1層出土
17-3	3.3	角 0.5×0.7	-	6次調査 第1層出土
18-1	7.3	角 0.6×0.4	折り曲げ(L字状)	7次調査 SD-05上層出土
18-2	5.5	角 0.4×0.4	折り返し	7次調査 4-A区 第2層出土

D 石製品（図19、表9、図版4）

石鏃、二次加工剥片、剥片、磨石が出土している。これらの詳細は表9にまとめている。

石鏃（図19-1～4）

1・2ともサヌカイト剥片を素材として形成された凹基鏃である。1はSK-103からの出土である。3はサヌカイトの横長剥片を素材として形成された凹基鏃である。4はサヌカイト剥片を素材として形成された平基鏃である。

二次加工剥片（図19-5）

5は横長剥片を素材として形成された二次加工剥片である。

剥片（図19-6）

横長剥片で、素材技術は硬質ハンマー直接打撃によっている。

磨石（図19-7）

約1/2を欠損する。砂岩の楕円礫を素材としており、全面に磨痕が認められる。Pit49出土。

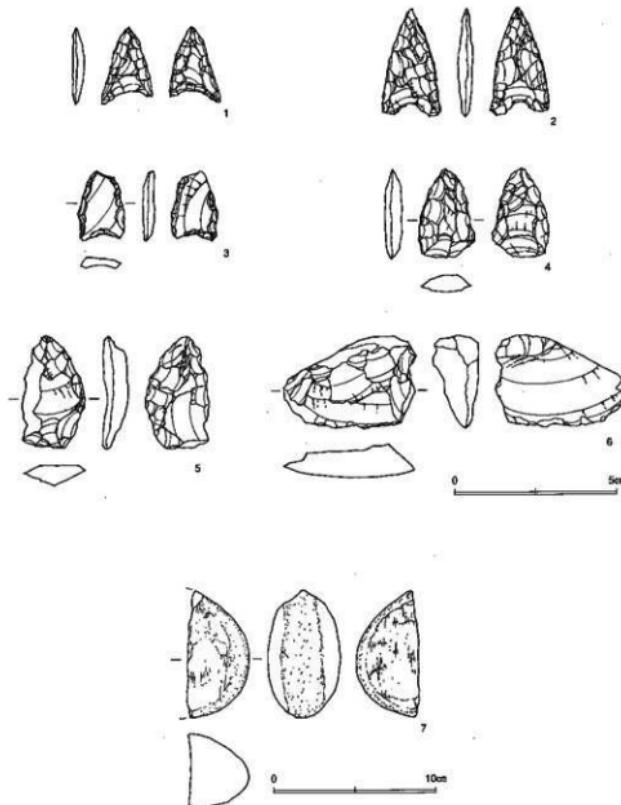


図19 下城・馬場遺跡（第6・7次）出土石器実測図

表9 下城・馬場遺跡（第6・7次）出土石器属性表

標図番号	種別	形態	石種	整形加工	素材技術	素材形態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
19-1	石鏃	凹基	サヌカイト	SP	不明	剥片	23.5	16.0	3.8	0.8	6次 SK103出土
19-2	石鏃	凹基	サヌカイト	SP	不明	剥片	33.2	18.3	5.2	1.8	6次 北抜張 1~2層出土
19-3	石鏃	凹基	サヌカイト	HP	HD	横長剥片	21.6	14.5	3.8	1.0	6次 北抜張 1~2層出土
19-4	石鏃	平基	サヌカイト	SP	不明	剥片	27.3	17.6	5.5	2.2	7次 NB-3区 造構面出土
19-5	二次加工剥片		サヌカイト	HP	HD	横長剥片	34.3	19.6	7.8	3.6	7次 NA-4区 2層出土
19-6	剥片		サヌカイト	-	HD	横長剥片	28.4	40.2	14.3	13.4	6次 北抜張 採集
19-7	磨石		砂岩	-	-	楕円錐	77.7	39.1	45.2	141.2	7次 Pit49出土

記号凡例: SP 軟質ハンマー押圧剥離 HP 硬質ハンマー押圧剥離 HD 硬質ハンマー直接打撃

茶臼（図20）

花崗岩製の下臼で、約1/3が残存する。受皿部は欠失するが、高さ13.4cm、復元下臼径14.4cm、復元芯径2.4cmを測る。掘目は8分画（主溝1条、副溝8条）と推定される。下臼面および受皿部内面、芯木孔は使用によって平滑となっている。受皿部以下には成形時の縦方向の整痕が残る。Pit38出土。

砥石（図21・22）

21-1は1面の使用面が残るのみで、この他の面は欠失する。使用面は平滑で、無数の擦痕も認められる。使用面および欠失箇所には、部分的に二次的な焼成（被熱）が確認できる。現存長24.1cm、現存幅14.0cm、現存厚8.3cmを測る。石材は未同定である。SK-01出土。

22-1は折損面以外の5面すべてに研磨が認められ、擦痕も確認できる。現存長10.1cm、幅4.2cm～4.5cm、重量79.5gをはかる。厚さは0.6cm～0.9cmあり、中ほどが若干、薄くなっている。石材は未同定である。Pit49出土。

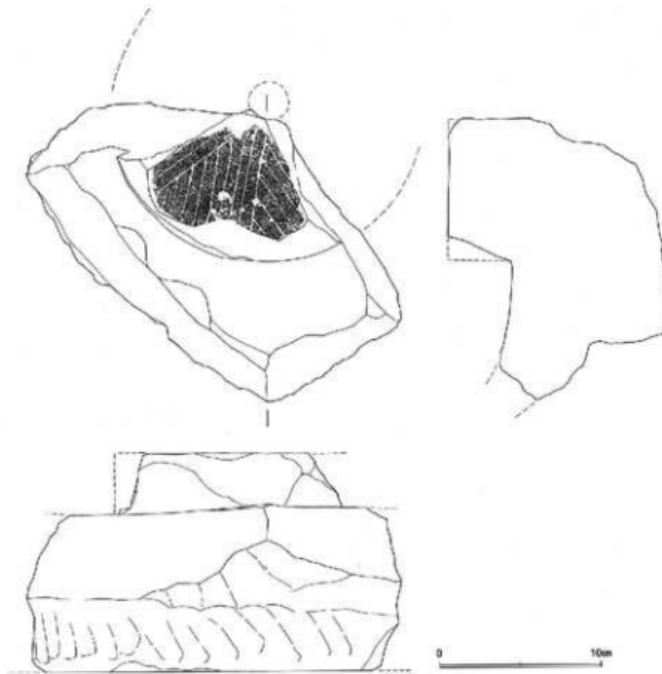


図20 下城・馬場遺跡（第7次）出土茶臼実測図

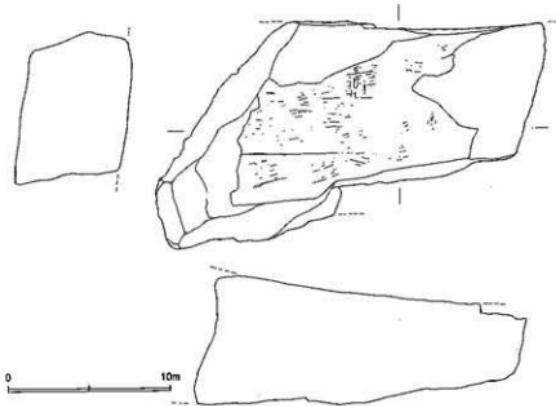


図21 下城・馬場遺跡（第6次）出土砥石実測図

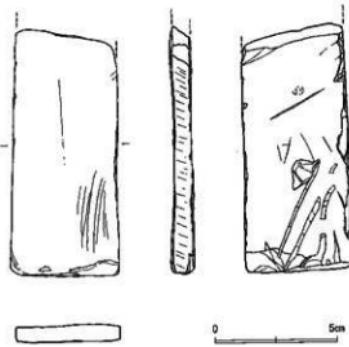


図22 下城・馬場遺跡（第7次）出土砥石実測図

（4）東尾根地区的遺構（図4）

今回、発掘調査と並行して東尾根の地形測量を実施した。紙幅の都合上、詳細は略するが、尾根西斜面に2段にわたって平坦面が造成されている。平坦面の小字はいずれも「下城」となっており、建物遺構の存在が予想されるところである。平坦面背後の尾根稜線には、尾根を分断する堀切も認められる。尾根先端の高所は、古墳状の隆起が認められるが、中世墳墓の可能性も考えられる。

4 ま と め

下城・馬場遺跡は、これまでの発掘調査等から縄文時代晩期～弥生時代前期、古墳時代後期、中世（12世紀～16世紀）の遺物が出土しており、上段における2次調査～4次調査では、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構を検出している。

7次調査では、下城・馬場遺跡の年代が、早期の押型文期にまで遡ることが明らかとなった。また、特筆すべき点としては、早期後半の、いわゆる東海系条痕文土器の出土があげられる。柏畠式の報告例としては、奈良県内では今のところ管見がなく、初のものとなった。ただ、報告されてはいないものの、県内でも柏畠式は少ないながらも出土しているようである。早期後葉の土器自身の出土例が少ないので、貴重な遺跡であるといえよう。該期の土器は、榛原町内では高井遺跡や坊ノ浦遺跡において出土している。また、同じく検出例の少ない前期土器も1点ではあるが確認されている。あわせて今後の調査に期するところが大きい。

次に後期の土器の検出がある。これまで下城・馬場遺跡では、1次調査において晩期の凸帯文土器を報告しているが、今回は後期の土器も出土している。この時期は、付近の沢遺跡のピークとも合致し、両遺跡の関係についても今後、明らかにしていかなければならない課題であるといえよう。

弥生土器についても第1次調査時と同様、前期のものが出土している。これについても沢遺跡との關係が課題であるといえる。

第6・7次調査では、13世紀から16世紀にわたっても土地利用がなされている。詳細は、今後の周辺での調査を含めて検討をするが、13世紀～14世紀代には、掘立柱建物数棟の存在が予想される。澤氏の居館跡である下城・馬場遺跡は、これまでの調査から建物の焼失、整地・再建が繰り返されていると考えられ、12世紀～16世紀にわたって、その機能を果たしている。

5 抄 錄

遺 跡 名 下城・馬場遺跡

(奈良県遺跡地図番号 15-D-90、榛原町遺跡地図番号 2-546)

調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字沢1390-1 (小字名:馬場)

測 量 調 査 奈良県宇陀郡榛原町大字沢1493他 (小字名:下城、馬場、清谷、下北)

遺 跡 立 地 標高約339m～351mの尾根斜面・谷部分

遺 跡 規 模 南北約700～800m、東西約300～400m

遺 跡 種 別 縄文時代～中世の遺物散布地、中世の居館跡

調 査 主 体 榛原町教育委員会 (教育長 田村義治)

調 査 担 当 者 榛原町教育委員会 生涯学習課 技師 柳澤一宏

調 査 原 因 範囲確認調査 (事業者:榛原町教育委員会)

現地調査期間 6次:2000年(平成12)2月29日～2000年3月31日

7次:2000年(平成12)4月26日～2000年8月10日

調 査 面 積 6次:85m²

7次:79m²

検出遺構 土坑、ピット、溝
検出遺物 6次：縄文土器、石鎚、サヌカイト剥片、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、円形土製品、陶器、磁器、鉄釘、小柄、火打金、瓦、壁土 <整理箱2箱>
7次：石鎚、サヌカイト片、磨石、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、茶臼、砥石、鉄釘 <整理箱3箱>
資料等の保管 榛原町教育委員会（文化財整理室）
調査後の措置 埋め戻し（保存）

註

- (1) 柳澤一宏 1985 「下城・馬場遺跡」 榛原町文化財調査報告第1集 榛原町教育委員会
- (2) 柳澤一宏 1994 「榛原町内遺跡発掘調査概要報告書」1993年度 榛原町文化財調査概要11 榛原町教育委員会
- (3) 柳澤一宏 1995 「榛原町内遺跡発掘調査概要報告書」1994年度 榛原町文化財調査概要14 榛原町教育委員会
- (4) 柳澤一宏 1999 「榛原町内遺跡発掘調査概要報告書」1997年度 榛原町文化財調査概要20 榛原町教育委員会
- (5) 柳澤一宏 2000 「榛原町内遺跡発掘調査概要報告書」1998年度 榛原町文化財調査概要21 榛原町教育委員会
- (6) 柳澤一宏 2001 「榛原町内遺跡発掘調査概要報告書」1999年度 榛原町文化財調査概要22 榛原町教育委員会
- (7) 泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科

参考文献

三輪茂雄 1978 「臼」ものと人間の文化史25 法政大学出版局

表3 下城・馬場遺跡(第6次)出土陶文土器觀察表

拂面番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調・施土・焼成	備考
10-1	縄文土器 深鉢	文様は縦位の山形文、調整はナデ。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	灰青褐色(10YR 5/2) 黄灰色(2.5Y 6/1)	早期前半 押型文土器
10-2	縄文土器 深鉢	内外面とも縦位の貝殻条痕。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	黒褐色(2.5Y 3/1) 黒褐色(2.5Y 3/1)	遺構面出土 前期?
10-3	縄文土器 深鉢?	ほぼ垂直な立ち上がり。口輪は丸くおさめる。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	にがい・褐色(7.5YR 5/4) 褐色(7.5YR 4/3)	遺構面出土 後期 外面強減
10-4	縄文土器	外面に縦位の条線、内面調整は横位 条痕。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	暗灰褐色(2.5Y 5/2) 黒褐色(2.5Y 3/1)	北京強区第3層出土 後期 条縞文土器
10-5	縄文土器	外面に丸ナデ調整。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	黒褐色(10YR 3/2) にがい・褐色(10YR 5/4)	北京強区第3層出土 SK-01出土 内面に漆付着
10-6	縄文土器 深鉢	外面に斜位の条痕、内面は横位条痕。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	暗褐色(7.5YR 3/3) 褐色(7.5Y 4/4)	SK-02出土
10-7	縄文土器	外面に斜位の条痕、内面は横位条痕。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	にがい・褐色(7.5YR 6/4) 灰青褐色(10YR 4/2)、褐灰色(10YR 4/1)	SK-01出土
10-8	縄文土器	外面は縦位の条痕、内面はナデ調整。	色調 内面 外面 火候 施土 焼成	にがい・褐色(10YR 6/2) 灰青褐色(10YR 5/3)	SK-02出土

押出番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
10-9	織文土器	外面は縦位の条痕、内面はナデ調整。	色調 胎土 焼成	内面 外面 にぶい黄褐色(7.5YR 6/4) 黒褐色(7.5YR 3/2)	SX-01出土
10-10	織文土器	外面は縦位の条痕か? 内面はナデ調整。	色調 胎土 焼成	内面 外面 にぶい黄褐色(10YR 6/4) やや粗 やや密	全面的に掌械 SX-01出土
10-11	織文土器	粘土輪換合部で欠け、「口縁状を呈する」いわゆる「断口縁」である。	色調 胎土 焼成	内面 外面 灰褐色(10YR 4/2) 褐色(10YR 4/4)	内面に紫付着 13と同一個体か? 北竜強区 第3層出土
10-12	織文土器	外面は下から上へのケズり、内面はナデ。	色調 胎土 焼成	内面 外面 にぶい褐色(7.5YR 5/4) やや密	SX-01出土
10-13	織文土器	外面はケズり、内面はナデ。	色調 胎土 焼成	内面 外面 黒褐色(7.5YR 3/2) 褐色(7.5YR 4/3)	内面に紫付着 11と同一個体か? SX-01出土

表4 下城・馬場遺跡(第7次)出土繩文土器観察表

検出番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
11-1	繩文土器 深鉢	やや反気味に立ち上がり、口縁 端部は面取りを施す。	2条の爪形、口縁端部にも刻み。縫 縫は擦痕状の条痕。	内面 に5y5/黄褐色(7.5YR 6/4) 外面 黒褐色(7.5YR 3/1)	早原後半(船型式)
11-2	繩文土器 浅鉢	頭部で一度屈曲した後、やや外反 気味に立ち上がる。いわゆる逆「L」 字状。	口縁に1条凸帯を貼り付ける。 縫はがき?。外面彫刻はナデ。	内面 暗灰色(N 3/0) 外面 暗灰色(N 3/0)	NB-3区 第4層(黒色土)出土 晚原後半(口縁井式) 凸帯文黒褐色彫刻
11-3	繩文土器 深鉢	垂直に立ち上がった後、やや外反 させる。	口縁に断面三角形の凸帯を貼り付ける。 凸帯上に縫は無い。彫刻はナデ。	内面 暗灰色(N 3/0) 外面 暗黃褐色(10YR 5/2)	Pt58出土 晚原後半 凸帯文土器
11-4	繩文土器 深鉢	外反しながら立ち上がり口縁で、 縫部には面をもつ。	内面は横幅の条痕。外面は斜位の巻 貝条痕。	内面 に5y5/黄褐色(10YR 6/3) 外面 灰褐色(7.5YR 4/2)	Pt58出土 良 やや粗
11-5	繩文土器 深鉢			内面 に5y5/黄褐色(10YR 6/3) 外面 黒褐色(2.5Y 3/1)	SX-01出土 良 やや粗
11-6	繩文土器 深鉢		外縁は下から上へのケガリ、内面はナデ。	内面 に5y5/黄褐色(10YR 6/3) 外面 褐灰色(7.5Y4/1)	SX-01出土 良 やや粗
11-7	繩文土器 深鉢		外縁は下から上へのケガリ、内面はナデ。	内面 褐灰色(7.5YR 3/1) 外面 やや苦	NB-3区 第2層出土 良
11-8	繩文土器 深鉢		外縁は下から上へのケガリ、内面はナデ。	内面 黒褐色(7.5YR 2/1) 外面 褐色(7.5Y 4/4)	SX-01土層アセ出土 良 好

挿図番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
11-9	縄文土器 深鉢	外面は下から上へのケズ。内面はナデ。	外面は下から上へのケズ。内面はナデ。	色調 胎土 焼成 内面 外面 にぶい黄褐色(10YR 6/2) 黒褐色(7SY 3/2) にぶい黄褐色(10YR 6/3)	SX-01出土
11-10	縄文土器 深鉢	内外面ともナデ。	胎土 焼成 内面 外面 にぶい黄褐色(10YR6/3)	色調 胎土 焼成 内面 黒褐色(7SY3/2) にぶい黄褐色(10YR6/3)	Ph156出土
11-11	縄文土器 深鉢	垂直に立ち上がった後、やや内側 気味におさめる。 調整はナデ。	胎土 焼成 内面 外面 にぶい黄褐色(10YR 6/3) 暗赤褐色(5YR 3/2)	色調 胎土 焼成 内面 外面 やや粗 やや良	施期後半 凸唇文土器 磁質Ⅳ式? 1302番地 織作土(採集)

表5 下城・馬場遺跡（第7次）出土弥生土器観察表

検出番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
12-1	弥生土器 甕		内楕しながら立ち上がり、口縁は外反する。口縁部はくさみある。	外面に3条の施塗状縦文。口縁部に刻み。調整はナブ。	内面 暗色(25YR 6/8) 外面 明赤褐色(2.5YR 5/6) 胎土 やや粗	大和I-2期式 採集
12-2	弥生土器 甕		内楕しながら立ち上がる。調整はナブ。	外面に3条の施塗状縦文。調整はナブ。	内面 暗色(25YR 4/3) 外面 灰褐色(7.5YR 4/2) 胎土 粘 焼成 良	大和I-2期式 PH51出土
12-3	弥生土器		外に開きながら立ち上がる。	外面は3カキ、内面はナブ調整か。	内面 にぶい橙色(7.5YR 6/4) 外面 明赤褐色(2.5YR 5/6) 胎土 やや滑 焼成 良	A-3区 第3層出土
12-4	弥生土器		内楕しながら立ち上がる。	外面は3カキ?、内面はナブ調整。	内面 淡黄色(25Y 7/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR 7/4) 胎土 粘 焼成 良	
12-5	弥生土器 釜	復元底部径 10.6 現存高 3.2	底部外面が若干くぼむ平底。体部は外上方へ開きながらのびる。	内外面ともナブ調整。	内面 暗灰色(10YR 4/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR 7/3) 胎土 粘 焼成 良	SD-04出土

表 6 下城・馬場遺跡（第6次）出土中世土器観察表

押出番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎・土・焼成	備考
13-1	土師器 皿	復元口径 器高 2.0	口縁部は直線的に外上方へのび、 口縁端部をやや尖り気味にする。 底部は平底である。	「口縁部内外面はヨコナデ。底部内 面はナデ。底部外面には指觸压痕。 」	色調 に近い黄褐色(10YR 7/3) 胎土 精良 焼成 良好	残存 1/4
13-2	土師器 皿	復元口径 器高 2.0	口縁部は直線的に外上方へのび、 口縁端部を尖り気味にする。底部 は平底である。器壁は10mmと薄い。	「口縁部内外面はヨコナデ。 底部内面には指觸压痕。	色調 内面 浅黄褐色(10YR 8/4) 外面 浅黄褐色(10YR 8/3) 胎土 精良 焼成 良好	SK-01出土 1/5
13-3	瓦質土器 擂鉢			内面に2条以上を1单位とする幅り 目を下から上へ施す。外圍には胫 いナデや指觸压痕。	色調 内面 略灰色(N 3/0) 外面 略灰色(10YR 4/1) 胎土 精良 焼成 良好	SK-01出土 1/5
13-4	土師器 土釜	現存高 1.2	口縁端部を上方へのぼし、断面形 態は三角形を呈する。	内外面ともヨコナデ。	色調 内面 に近い黄色(7.5YR 7/4) 外面 灰褐色(5YR 4/2) 胎土 精良 焼成 良好	SK-01出土 1/10
13-5	土師器 土釜	復元体積計大さ 復元調査 現存高 18.0 20.2 4.6	体部は内側捲する。体部最大径のと ころに、輪の短い跡を貼り付ける。	「体部外表面はヨコナデ、内面はナデ。 」	色調 内面 に近い黄褐色(10YR 7/4) 外面 黑色(10YR 2/1) 胎土 精良 焼成 良好	SX-01出土 1/10
13-6	土師器 (灯明皿)	口径 器高 8.9 1.6	口縁部内外面はヨコナデ。底部内 面はナデ。底部外面には指觸压痕。 底部中央はやや上部である。器形 はやや歪む。	「口縁部内外面はヨコナデ。底部内 面はナデ。底部外面には指觸压痕。	色調 に近い黄褐色(10YR 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	ほぼ完形 口縁端部に煤付着
13-7	土師器 皿	復元口径 現存高 11.0 1.8	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁端部は尖り気味におさわる。 ヨコナデ。	「口縁部下半は指觸压痕。その他の ヨコナデ。」	色調 内面 に近い黄褐色(10YR 7/4) 外面 灰褐色(10YR 6/2) 胎土 精良 焼成 良好	Phi10出土 1/7
						Phi11出土

検査番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
13-8	土師器 直	復元口径 現存高 1.9	口縁部下半は直線的に外上方に伸び、上部が少し曲がる。口縁端部は尖り氣味がある。器盤は0.1mm~0.2mmと薄い。	口縁部下半は指頭圧痕。その他の施はヨコナデ。	色調 にふくらむ黄色(2.5Y 6/3) 胎土 精良 焼成 良好(2次焼成)	残存 1/6
13-9	土師器 皿	口径 器高 1.3	口縁部は直線的に外上方に伸び、口縁端部をやや尖り氣味にする。器盤は0.1mm~0.2mmと薄い。	内面及び口縁端部は右方向のヨコナデ。内面中央にはナデ。背面中央にはナデ。その他の施は指頭圧痕。	色調 内面 棕色(5YR 6/6) 外面 にふくらむ黄色(7.5YR 6/4) 胎土 精良 焼成 良好	Pt11出土 「横幅1999年度」掲載
13-10	土師器 皿	口径 器高 1.5	口縁部はやや内凹気味に外上方に伸びる。口縁端部をやや尖り氣味にする。底盤は上げ底である。	内面及び口縁端部は右方向のヨコナデ。内面中央にはナデ。背面中央にはナデ。その他の施は指頭圧痕。	色調 にふくらむ黄色(10YR 6/4) 胎土 精良 焼成 良好	Pt19出土 「横幅1999年度」掲載
13-11	土師器 皿	復元口径 現存高 2.0	口縁部はやや直線し、外上方方に伸びる。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部下半は指頭圧痕。その他の施はヨコナデ。	色調 にふくらむ黄色(10YR 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	Pt19出土 残存 1/10
13-12	土師器 皿	復元口径 器高 1.8	口縁部はやや内凹気味に外上方に伸びる。底盤はやや上部が盛りつく。	内面は全面に不定方向のハケ目。口縁部外面はヨコナデ。底盤内面には指頭圧痕。	色調 棕色(7.5YR 6/6) 胎土 精良 焼成 良好(2次焼成)	Pt19出土 残存 1/2
13-13	土師器 皿	復元口径 器高 1.0	口縁部はやや内凹気味に外上方に伸びる。底盤は尖り氣味にする。底盤は平らにつくる。	口縁部外面はヨコナデ。底盤内面には指頭圧痕。	色調 にふくらむ黄色(10YR 6/3) 胎土 精良 焼成 良好	Pt22出土 残存 1/8
13-14	瓦質土器 鋼(鉢)	復元口径 現存高 4.8	口縁部は内凹気味に外上方への伸びる。口縁端部は尖り氣味である。	口縁端部は、胎土の外方への折れ。外表面は内凹気味に外反し、丸くおさめる。	色調 内面 淡色(N 4/0) 外面 灰白色(2.5Y 7/1) 胎土 精良 焼成 良好	1層出土 残存 1/8 北丸張1-2層、3層出土

査定番号	器種	法景(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備考
13-15 鉢	瓦質土器	現存高 3.9	平底の底部から体部は、やや内側 気瓶に外へ上方へのびる。	内外面ともシナデ。底部は貼り付けによつて形成。	色調 内面 灰黄褐色(10YR 6/2) 外面 褐灰色(10YR 4/1) 胎土 精良 焼成	1層出土
13-16 陶器 擂钵	擂钵	現存高 3.4	口縁端部を丸く仕上げ、前面に1 条の沈線、外面には2条の沈線を めぐらせる。口縁端部外面の下端 は、突出し断面形態は三角形を呈 する。	内外面ともヨコナデ。内面には彫り目。 口縁端部を丸く仕上げ、前面に1 条の沈線、外面には2条の沈線を めぐらせる。口縁端部外面の下端 は、突出し断面形態は三角形を呈 する。	色調 内面 赤色(10R 5/6) 外面 暗赤褐色(10R 3/3) 赤褐色(10R 4/4) 胎土 精良 堅硬 焼成	北竜塚1号墳出土

表7 下城・馬場遺跡(第7次)出土中世土器觀察表

査定番号	番種	法量(cm)	形態の特徴	技術の特徴	色調・胎・焼成	備考	
14-1	土師器 皿	復元口径 現存高	13.4 2.6	体部内側気味に外上方へびがる。 口縁端部内側には洗鉢を施す。 半は指測正直。	底部下 色調 緑灰色(5G 5/1) 胎土 精良 良好	残存 1/9 SD-05下層出土	
14-2	土師器 皿	復元高台径 現存高	5.6 0.8	底部内面には、同心円彫文。底部 外面には、高台端付つけ時のヨコナ デ。	底部 色調 灰(5/0) 胎土 精良 良好	残存 1/5 SD-05下層出土	
14-3	土師器 皿	復元口径 現存高	7.4 2.9	体部はやや内凹気味に外上方へ 上げる。口縁端部は尖り気味に仕 上げ、内側には洗鉢を施す。	内面には組い縫方向の彫文。口縁 端部はヨコナデ。体部外面下半は 指測正直。	内面 色調 灰白色(25Y 8/2) 外面 灰白色(25Y 7/1) 胎土 精良 良好	SD-05下層出土 残存 1/6
14-4	土師器 皿	復元口径 現存高	11.4 1.4	口縁部はやや内凹して外上方へ 上げる。口縁端部はやや肥厚し、 丸い。	内面および口縁端部外面はヨコナデ。 体部外面にはナザ。内面には指測正直。	内面 色調 燒成 灰色(7.5YR 7/6) 胎土 精良 良好	SD-05上層出土 残存 1/8 SX-01出土
14-5	土師器 皿	復元口径 現存高	4.5	体部は内凹気味に外上方へびがる。 口縁端部は外反し、丸い。	内面および口縁端部外面はヨコナデ。 体部外面はナザ。内面には指測正直。	内面 色調 灰色(N 4/0) 外面 灰色(N 6/1) 胎土 精良 良好	SX-01出土 残存 1/8
14-6	土師器 皿	復元口径 現存高	8.6 1.2	口縁部は外反気味に外上方への びがる。口縁端部は尖り気味におさ めら。	内面および口縁端部外面はヨコナデ。 底部外面には指測正直。	内面 色調 浅黄褐色(7.5YR 8/6) 外面 浅黄褐色(10YR 8/3) 胎土 精良 良好	SX-01出土 残存 1/6
14-7	瓦質土器 鉢	復元口径 現存高	12.0 3.9	体部は内凹気味に上方へのび、 口縁端部をくびおさめる。 文を施し、その上下にそれぞれ1条 の銀錠をめぐらせる。	外表面はテテ方向のヨガキ。内面はヨ コナデ。外側には四角形のダンブ 文を施す。	内面 色調 浅黄褐色(10YR 8/4) 外表面 褐色(5YR 6/6) 胎土 精良 良好	Pt-26出土 残存 1/8 Pt-26出土

補図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
14-8	土師器 皿 (打刃直)	復元口径 現存高 1.6	口縁部はやや内凹気味に上方へ のび、口縁端部を丸くおさめる。	内部および口縁部外面はヨコナデ。 外部外面には指壓圧痕。	赤褐色 胎土 焼成	内面 浅黃褐色(10YR 8/4) 外面 に赤い黃色(7.5YR 7/3)	残存 1/5 内面に焼付着
14-9	瓦質土器 擂鉢	現存高 4.1	体部はやや内凹気味に外へ上方に のび、口縁端部は外反する。口縁 端部は先細るが丸くおさめる。	内部および口縁端部外面はヨコナデ。 体部外面はナデ。内部には割り目。	赤褐色 胎土 焼成	に赤い黃褐色(10YR 7/3)	PtG2H出土
14-10	土師器 皿	口径 高 1.6	亞みが大きいが、口縁部は内側し て上方へのび、口縁端部は尖り氣 味に仕上げる。底部は凹凸がある。 筆文	口縁部内部はヨコナデ。底部内部 はナデ。外面は全体にわたって が焼る。	赤褐色 胎土 焼成	内面 褐色(5YR 7/6) 外面 橙色(7.5YR 7/6)	PtG3出土 は焼形
14-11	瓦質土器 火鉢	現存高 7.0	体部は直線的で平底である。体部下方へ のび、底部は丸くおさめる。	突唇以上及び下方のミガキ、突唇 以下はヨコナデ。底部外面はナデ。 内面はヨコナデ。	赤褐色 胎土 焼成	黒褐色(10YR 3/1) 内面 に赤い黃褐色(10YR 7/2)	PtG4出土
14-12	土師器 皿	復元口径 現存高 1.9	口縁部は直線的に外へ上方へのび、 外面には突唇を貼り付ける。	内部および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指壓圧痕。	赤褐色 胎土 焼成	に赤い黃褐色(10YR 7/2)	残存 1/6
14-13	土師器 皿	復元口径 器高 1.9	口縁部が外反気味に上方へのび、 口縁端部を丸くおさめる。	内部および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指壓圧痕。	赤褐色 胎土 焼成	内面 に赤い黃褐色(10YR 7/3)	PtG5出土 残存 1/3
14-14	土師器 皿	復元口径 現存高 2.5	口縁部はやや内凹気味に上方へ のび、口縁端部を丸くおさめる。	内部および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指壓圧痕。	赤褐色 胎土 焼成	橙色(5YR 6/6) 内面 に赤い黃褐色(10YR 6/6)	PtG6出土 残存 1/5
15-15	瓦器 鉢	現存高 2.0	体部はやや内凹気味に外へ上方へ のび、口縁端部はやや外反し、 内側には比較を施す。	外部面立ちや強い塊方向の端文。	赤褐色 胎土 焼成	灰色(N 4/0)	NB-2K 第2層出土 A-3区 第2層出土

神田番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	技法的特徴	色調・胎土・焼成	備考
15-16	瓦質土器 擂鉢		全体はやや内壁氣味である。	外面上半はコナデ、下半は指頭圧痕。内面はコナデのび8条以上を1単位とする振り目を下から上へ施す。	色調 内面 淡黄褐色(10YR 8/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR 6/3) 灰黄褐色(10YR 5/2)	NB-4区 第2層出土
15-17	土師器 皿	復元口径 現存高	8.2 0.8	口縁部は直線的に外方へのび、器高が低い。口縁端部は丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 精良 焼成 良好
15-18	土師器 皿	復元口径 現存高	12.6 2.2	口縁部は内壁氣味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 精良 焼成 良好
15-19	土師器 皿	復元口径 現存高	12.4 1.7	口縁部はやや内壁氣味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 精良 焼成 良好
15-20	土師器 (灯明皿)	復元口径 現存高	8.4 1.7	口縁部は内壁氣味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 精良 焼成 良好
15-21	土師器 (灯明皿)	復元口径 器高	8.2 1.7	口縁部は内壁氣味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめる。底部はやや丸味がある平底につくる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 精良 焼成 良好
15-22	瓦質土器 火鉢			外面に圓形容のスタッフ文。内面はナデ。	色調 内面 灰色(N 5/0) 外面 灰色(N 4/0)	NB-2区 第3層出土

揮園番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調	粘土・焼成	備考
15-23	陶器 壺	復元底部直径 16.8 復元底部高 11.0 現存高 12.3	体部は内側・上方へのび、横幅を半は縦き落し?。底部は平底である。 体部内面は同心円文。底部内面には自然輪。	体部外面の大半には輪条・外側下輪にぶい黄色(10YR 6/3) 輪にぶい褐色(10YR 6/3) 輪にぶい褐色(10YR 3/2) 輪オリーブ色(5Y 3/2)	内面 外側 輪	内面 輪にぶい褐色(10YR 6/2) 輪にぶい褐色(10YR 6/2) 輪にぶい褐色(5Y 3/2)	残存 1/3
15-24	土師器 皿	復元口径 7.8 現存高 1.1	口縁部が外反気味に外上方へのび、 底部輪部を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NA-3区 第2層出土 NB-3区 第3層出土 残存 1/6
15-25	土師器 皿	復元口径 8.2 器高 1.5	口縁部が内反気味に外上方へのび、 輪部を丸くおさめる。底部中央 はやや上り形成氣味につくる。	口縁部内部外面はヨコナデ。底部内 面はナデ。底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NB-2区 第4層出土 残存 1/4
15-26	土師器 皿	復元口径 7.6 器高 1.1	口縁部はよく上方へのび、口縁部 を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NB-2区 第4層出土 残存 1/2
15-27	土師器 皿	口径 6.8 器高 1.7	口縁部はやや外反気味に外上方 へのび、口縁部を丸くおさめる。 底部はやや歪みがある上げ底につ くる。	口縁部内部外面はヨコナデ。底部内 面はナデ。底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NB-2区 第4層出土 残存 4/5
15-28	土師器 皿	復元口径 10.8 器高 2.1	口縁部はやや内弯気味に外上方 へのび、口縁部を尖り気味におさ める。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NB-2区 第4層出土 残存 1/4
15-29	土師器 皿	復元口径 10.3 器高 1.7	口縁部はやや内弯気味に外上方 へのびる。口縁部を尖り気味におさ める。	内面および口縁部外面はヨコナデ。 底部外面には指頭圧痕。	胎土 焼成	胎土 焼成	NB-2区 第4層出土 残存 1/6

補図番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	技法的特徴	色調(始土・焼成)	備考
15-30 土師器 皿 (灯明皿)	復元口径 器高	10.0 2.1	口縁部は内壁気味に外上方へのび、 口縁端部を尖り氣味におさめる。底 部はやや上げ底につくる。	内面および口縁部外面はヨコナダ。 底部外面には指削圧痕。	色調 にぶい黄橙色(10YR 7/2) 始土 精良 焼成 良好	残存 1/3 口縁端部外面に塗付着
15-31 土師器 皿 (灯明皿)	復元口径 現存高	10.0 1.8	口縁部は内壁気味に外上方へのび、 口縁端部を尖り氣味におさめる。	口縁部内外面はヨコナダ。底部内 外面にはナダ。底部外面には指削圧 痕。	色調 にぶい黄橙色(10YR 7/3) 始土 精良 焼成 良好	NB-2区 第4層出土 残存 1/3 口縁端部外面に塗付着
15-32 土師器 土釜			口縁部は外上方へのびる。口縁端 部上端は上方へ引出い断面形態 は方形を呈する。	内面ともヨコナダ。	色調 内面 淡黄黃色(10YR 8/3) 外面 黒褐色(10YR 3/1) 始土 精良 焼成 良好	NB-2区 第4層出土 外面上に塗付着
15-33 土師器 土釜			口縁部は外方へのびる。口縁端部 はやや肥厚し、断面形態は方形を 呈する。	内面ともヨコナダ。	色調 内面 淡黄黃色(5YR 5/3) 外面 黑褐色(15YR 2/1) 始土 精良 焼成 良好	NB-2区 第4層出土 外面上に塗付着
15-34 土師器 皿	復元口径 器高	7.2 13.0	口縁部はやや内壁氣味に外上方 へのび、口縁端部を丸くおさめる。 底部は平底につくる。	口縁部内外面はヨコナダ。底部内 外面にはナダ。底部外面には指削圧 痕。	色調 にぶい橙色(5YR 6/3) 始土 精良 焼成 良好	NB-2区 第4層出土 残存 1/3
15-35 土師器 皿	復元口径 現存高	10.2 1.8	口縁部は直線的に外上方へのび、 口縁端部を尖り氣味におさめる。	内面および口縁部外面はヨコナダ。 底部外面には指削圧痕。	色調 淡黄橙色(10YR 8/3) 始土 精良 焼成 良好	NB-2区 遷拂面出土 残存 1/8
15-36 土師器 皿	復元口径 現存高	12.4 1.6	口縁部は直線的に外上方へのび、 口縁端部を尖り氣味におさめる。	内面および口縁部外面はヨコナダ。 底部外面には指削圧痕。	色調 淡黄橙色(10YR 8/3) 始土 精良 焼成 良好	NA-3区 遷拂面出土 残存 1/8
15-37 土師器 皿	復元口径 器高	12.0 2.2	口縁部は直線的に外上方へのび、 口縁端部を丸くおさめる。	内面および口縁部外面はヨコナダ。 その他の内面には指削圧痕。	色調 淡黄橙色(10YR 8/4) 始土 精良 焼成 良好	NA-3区 遷拂面出土 残存 1/5
						NB-2区 遷拂面出土

IV 額井南遺跡第3次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

額井南遺跡は、中世の遺物散布地（榛原町遺跡地図番号1-5）として登載してきたが、1995（平成7）年の発掘調査（第1次調査）によって縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地であることが明らかとなった。その後、1997年（平成9）には、町道の拡幅工事に伴う発掘調査（第2次調査）を実施しているところである（図23）。

この遺跡範囲推定地の南東端において、個人による農地の形状変更等が計画され、1999年（平成11）12月24日に埋蔵文化財発掘届が提出された。その後、関係機関等が発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において実施することとなった。遺構・遺物の状況が明らかでないため、これを確認する発掘調査（確認調査）を実施することとし、現地調査（第3次調査）を2000年（平成12）5月11日から5月12日、5月19日にかけて実施した。

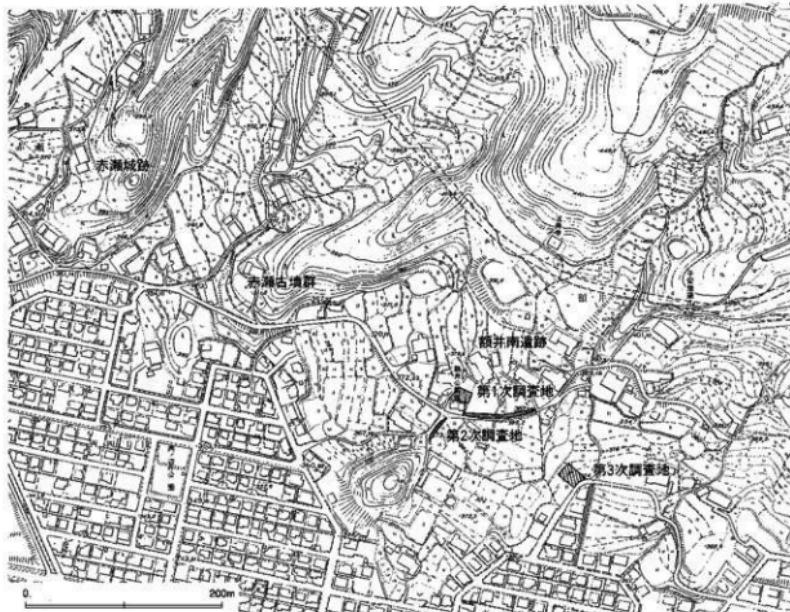


図23 額井南遺跡調査位置図

2 位置と環境

額井南遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字額井に位置し、当地の高峰のひとつである額井岳の山裾の標高約370m～390mの尾根斜面や谷部分に広がる。遺跡の明確な範囲は、明らかにできないが、概ね南北約150m、東西約200～300mと推定される（図23）。

この遺跡の南方は、過去の大規模開発によって改変され、遺跡の分布状況等は不明な点が多いが、西方には赤瀬古墳群（6世紀の横穴式石室墳）、赤瀬城跡（中世）、赤瀬遺跡（縄文時代～中世の遺物散布地）等の遺跡が分布する。

3 遺跡の調査

（1）調査区と基本層序

調査対象地のほぼ中央にトレンチを設定し、掘削を進めたが、遺構・遺物の検出状況等から結果的には、小規模な調査面積となった（図24、図版5）。

基本層序は、第1層が現在の整地土、

（2）検出遺構と出土遺物

第2層が黒灰色粘土、第3層が拳大の榛原石を多く含む灰色粘土となっている。第2層中から摩滅した瓦器片1点、土師器片1点が出土したのみである。現地表から約15mの深さまで掘削を行ったが、遺物の出土状況、事業の性格等を勘案して、これ以上の掘り下げを行わないこととした（図25、図版5）。

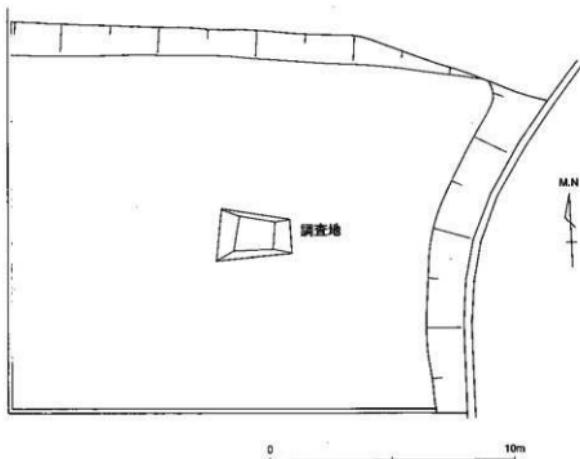


図24 額井南遺跡（第3次）調査位置図

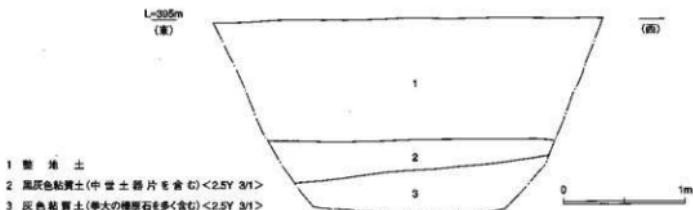


図25 頼井南遺跡（第3次）土層断面図

4 ま と め

今回の調査地は、地形図及び調査結果から谷部分に相当し、明確な遺構は認められない地区と推定される。少量の土器片は、中世のものではあるが、小片のため明確な時期を明らかにできない。

5 抄 錄

遺 跡 名 頼井南遺跡

(奈良県遺跡地図番号 12-D-52、榛原町遺跡地図番号 1-5)

調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字額井519番地

遺 跡 立 地 標高約370m～390mの尾根斜面・谷部分

遺 跡 規 模 南北約150m、東西約200m～300m

遺 跡 種 別 縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地

調 査 主 体 榛原町教育委員会（教育長 田村義治）

調 査 担 当 者 榛原町教育委員会 生涯学習課 技師 柳澤一宏

調 査 原 因 個人農地の形状変更等（事業主体：大手次夫）

現地調査期間 2000（平成12）年5月11日～5月19日

調 査 面 積 6 m²

検 出 遺 構 なし（自然谷地形）

検 出 遺 物 瓦器片1点、土師器片1点

資料等の保管 榛原町教育委員会（文化財整理室）

調査後の措置 明確な遺構が認められないため、工事実施

V 丹切遺跡第10次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

丹切遺跡は、縄文時代から中世にいたる遺物散布地で、奈良県遺跡地図番号15-B-8、橿原町遺跡地図番号1-98として登載しているところである。この遺跡北東端の住宅地内において、個人住宅の改築工事が計画され、2000年11月には埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、橿原町教育委員会において調査を担当することとなった。現地調査は、2001年2月16日に着手し、その後、断続的に地形測量調査等を行い、同年3月26日に終了した。なお、丹切遺跡の発掘調査は、今次で第10次調査となる。

2 位置と環境

丹切遺跡は、橿原の市街地の南端部にあたり、丹切古墳群から宇陀川へと緩やかに北へ傾斜する谷丘地帯から旧宇陀川右岸の河岸段丘上に位置する。調査地は、遺跡の東辺部分、北西に開く谷地形の下流部分（標高約313m）にあり、谷背後の尾根上には丹切古墳群が位置する（図26・27）。

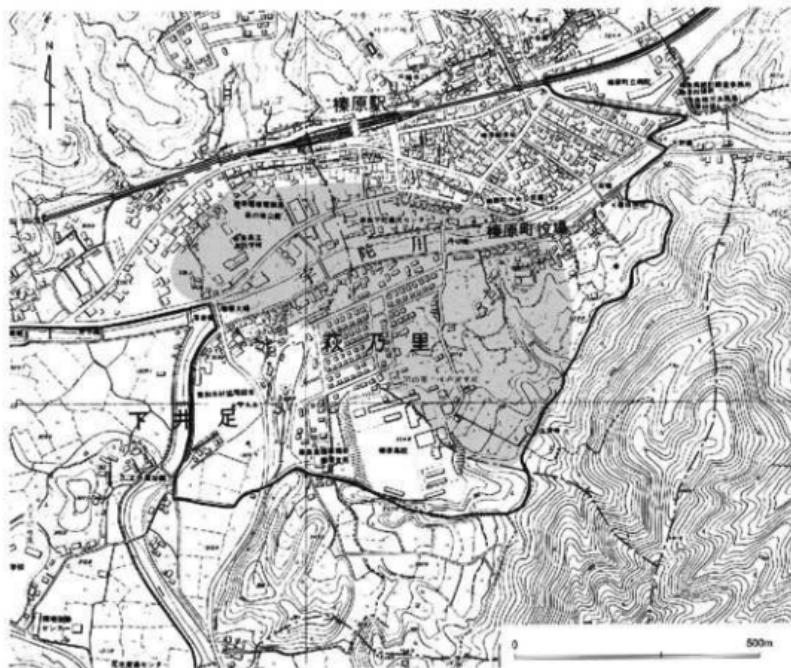


図26 丹切遺跡位置図

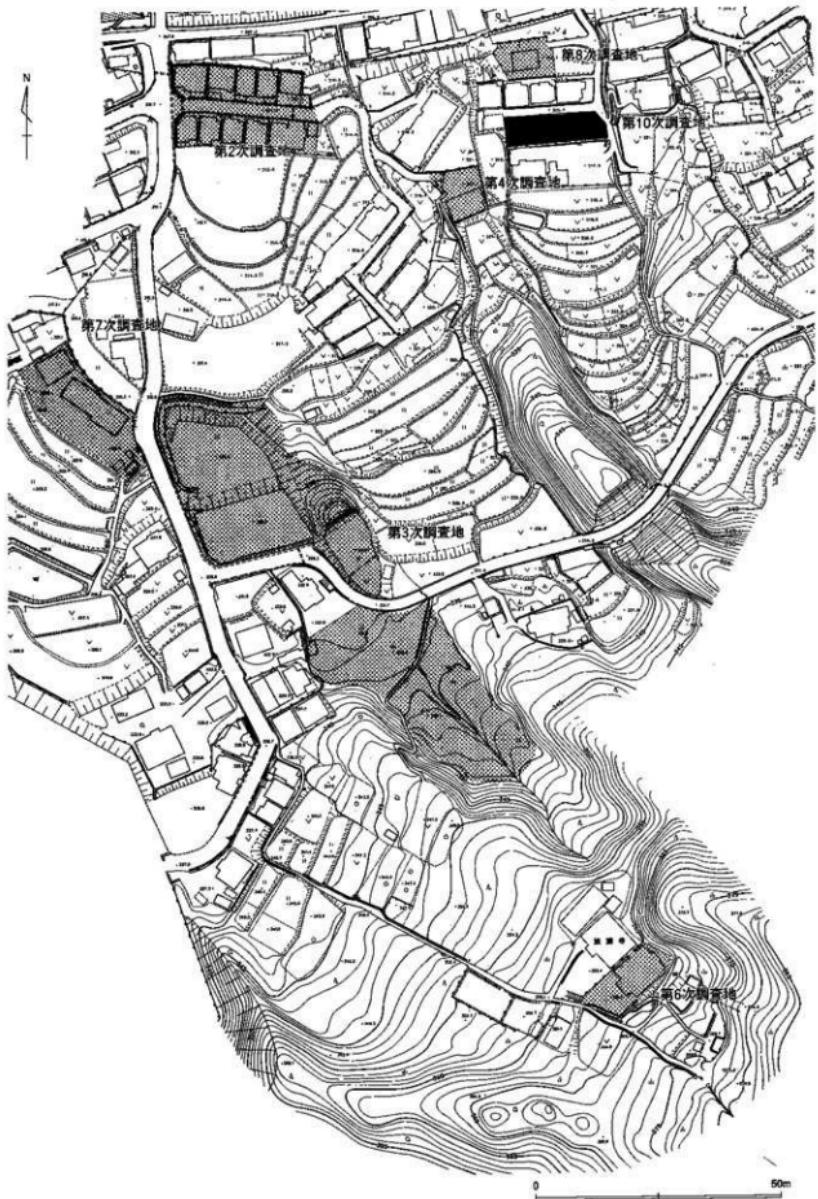


図27 丹切遺跡（第10次）調査位置図（1）

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

工事予定地（面積：約497m²）のうち、建物建設地東隣部分にトレンチ（長さ約3.6m、幅約2.6m）を設定し、遺構・遺物の検出につとめた（図28、図版6）。

基本層序は、第1層が整地上、第2層が暗灰黄色土、第3層が暗灰黄色土、第4層が灰黃褐色土、第5層が黄灰色粘土、第6層が灰色粘土となっている。地表からトレンチ底までの深さは、約2.4mである（図29、図版6）。

(2) 検出遺構

調査地は、地形及び基本層序から自然谷地形内にあり、また、狹隘な調査面積のため明確な遺構は検出できなかった。

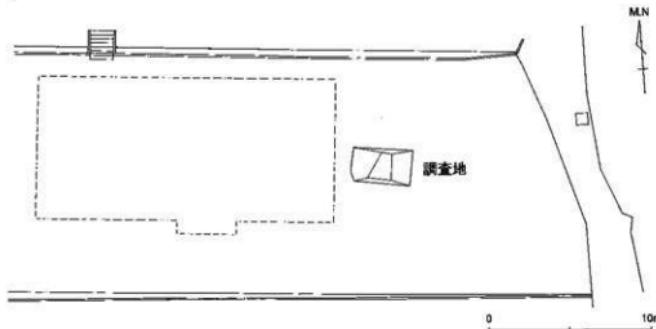


図28 丹切遺跡（第10次）調査位置図（2）

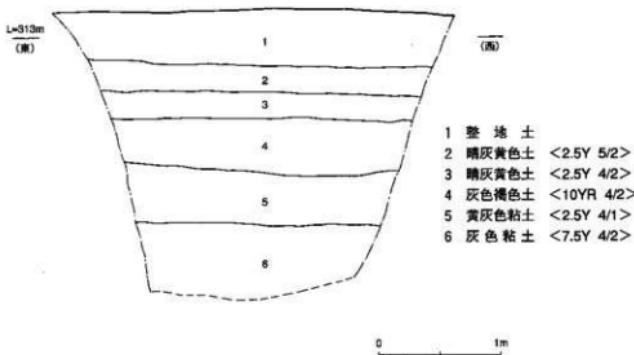


図29 丹切遺跡（第10次）土層断面図

(3) 出土遺物

第5層中より、須恵器壺の破片1点、掘削土内より中世の土師皿片1点が出土したに過ぎない。

須恵器壺の外面は格子ふう叩目文のちカキ目、内面は同心円文が認められる。外面には灰オリーブ色の自然釉が認められ、焼成は堅緻である。小片のため、詳細は明らかにできないが、内外面の調整等から6世紀代のものと考えられる(図30)。



図30 丹切遺跡(第10次)出土須恵器実測図

4 まとめ

丹切古墳群から宇陀川へと遡ぐ旧河川は、いくつかあったと考えられ、今回の調査地もその一つであったと考えられる。深さ約2mまで掘削し、遺構・遺物の検出につとめたが、顕著なものは認められなかった。旧河川が機能していた明確な時期は明らかにできないが、中世には谷は埋没し、現地形に近い景観を呈するようになったと考えられる。上方の谷部分や尾根周辺に遺構・遺物が埋蔵されている可能性が高いが、今後の調査等に期待するところが大きい。

5 抄 錄

遺 跡 名 丹切遺跡

(奈良県遺跡地図番号 15-B-8、榛原町遺跡地図番号1-98)

調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字荻原 元荻原 533、534、535

遺 跡 立 地 標高約307~360mの谷部・河岸段丘・低地

遺 跡 規 模 南北約700~800m、東西約300~400m

遺 跡 種 別 縄文時代~中世の遺物散布地

調 査 主 体 榛原町教育委員会(教育長 田村義治)

調 査 担 当 者 榛原町教育委員会 生涯学習課 技師 柳澤一宏

調 査 原 因 個人住宅建設工事(事業者:松本重寛他)

現地調査期間 2001年(平成13)2月16日~2001年(平成13)3月26日(測量調査期間含む)

調 査 面 積 9 m²

検 出 遺 構 なし(自然谷地形)

検 出 遺 物 須恵器1点、土師器1点

資料等の保管 榛原町教育委員会(文化財整理室)

調査後の措置 明確な遺構が認められないため、工事実施

図 版



7次調査地（南から）



7次調査地（西から）

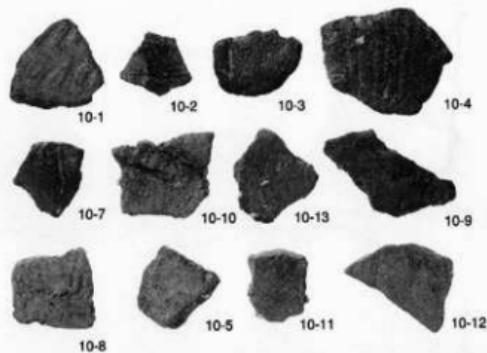
図版二
下城・馬場遺跡



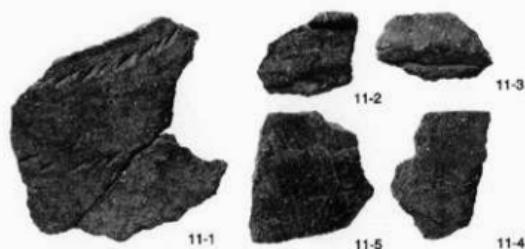
6次調査地（北から）



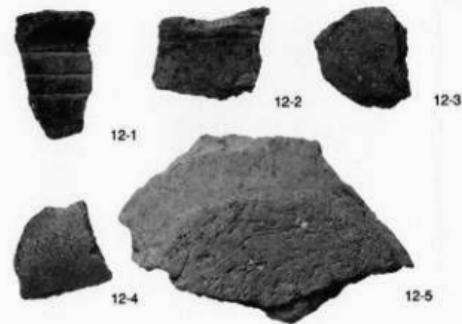
6次調査地（南から）



6次調査出土縄文土器



7次調査出土縄文土器



7次調査出土弥生土器



6次調查出土石器



7次調查出土石器（1）



7次調查出土石器（2）



調査地（東から）



土層断面（北から）



調査地（東から）



土層断面（北から）

報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	株原町内遺跡発掘調査概要報告書 2000年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	株原町文化財調査概要							
シリーズ番号	25							
編著者名	柿澤一宏							
編集機関	株原町教育委員会							
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀郡株原町大字萩原 164番地 TEL 0745-82-1301(代)							
発行年月日	西暦 2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下城・馬場遺跡 (第7次)	奈良県宇陀郡株原町 大字沢1417番地	29383		34度 29分 21秒	135度 58分 14秒	2000.04.26 2000.08.10	79	範囲確認調査
額井南遺跡 (第3次)	奈良県宇陀郡株原町 大字額井519番地	29383		34度 32分 45秒	135度 58分 40秒	2000.05.11 2000.05.19	6	個人農地改良工事
丹切遺跡 (第10次)	奈良県宇陀郡株原町 大字萩原 元萩原533~535番地	29383		34度 31分 26秒	135度 57分 42秒	2001.03.16 2001.03.26	9	個人住宅建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
下城・馬場遺跡 (第7次)	遺物散布地 居館跡	縄文~古墳、中世		土坑、溝、ピット	縄文土器、石器、磨石、サヌカク卜洞片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、茶臼、砾石、鉄釘他			縄文時代早期~前期にも集落の可能性
額井南遺跡 (第3次)	遺物散布地	縄文~古墳、中世	なし(自然谷地形)	瓦器、土師器				
丹切遺跡 (第10次)	遺物散布地・墓葬 跡	縄文~中世	なし(自然谷地形)	須恵器、土師器				

株原町内遺跡発掘調査概要報告書 2000年度

株原町文化財調査概要 25

2002年3月29日

発行 株原町教育委員会
編集 奈良県宇陀郡株原町大字萩原164番地

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地